

つてゐる。またその醇化されたことばのかげに、事實の特異と事件の複雑さを示してゐる技巧に於て、新しい効果を収めてゐるものがある。

【紫式部】(むらさき) 文學者【姓】藤原【本名】未詳【別名】初めは藤原式部と稱せられた。その藤原の姓から、式部は父爲時の子位式部(小右記)三年十一月十四日の條及び同二年十二月八日の條等)又は兄惟親のそれ(源朝野御式部日記)から来たものであらう。後には紫式部と稱せられた。この藤原が紫式部になつたに就いては古來多くの説があるが、(一)此物語の著作と紫式部之故、此名とする説(源朝野御式部日記)に引く、(二)一條院御乳母の子也。兩上東門院令、奉トテ音ニムカリノ物ナリ、アハレト思食セト合、申物故有、此名ニ式部野也とする説(源朝野御式部日記)に引く、(三)一部の中に紫の上の事をすげられて書き出でたために紫式部の名をあらためて紫式部と號せられたりとする説(源朝野御式部日記)に引く、(四)藤原の名詞支ならすとて後に藤の花のゆかりに紫の字にあらためらるゝと云ふ説(源朝野御式部日記)に引く、(五)紫式部は、紫野山林院の境内のほとりに住んだゆゑの名なるべしと云ふ説(源朝野御式部日記)に引く、(六)紫式部は、藤原氏の説があるが、現在の研究範圍では、第三説(源朝野御式部日記)に引く「藤原紫式部」説が最も有力である。



有力である。享年未詳。五十七歳とする説(大日本史本朝女御)もあるが、「生没」に於ける「紫式部」の推測と、奥野品子氏の「紫式部」の説を参照すれば三十歳となる。未だ定説と見るべきものはないが、今暫く三十九歳の推定に従ふ。【墓所】山城國葛野郡紫林院村在、紫林院白毫院南(河津朝野御式部日記)に引く「宇治葛野山」。

Table with columns for years (天長, 天保, 寛弘, 寛和, 寛仁, 寛平, 寛政, 寛文, 寛政, 寛文, 寛政, 寛文) and rows for events related to Murasaki Shikibu's life, such as her birth, marriage, and the completion of 'The Tale of Genji'.

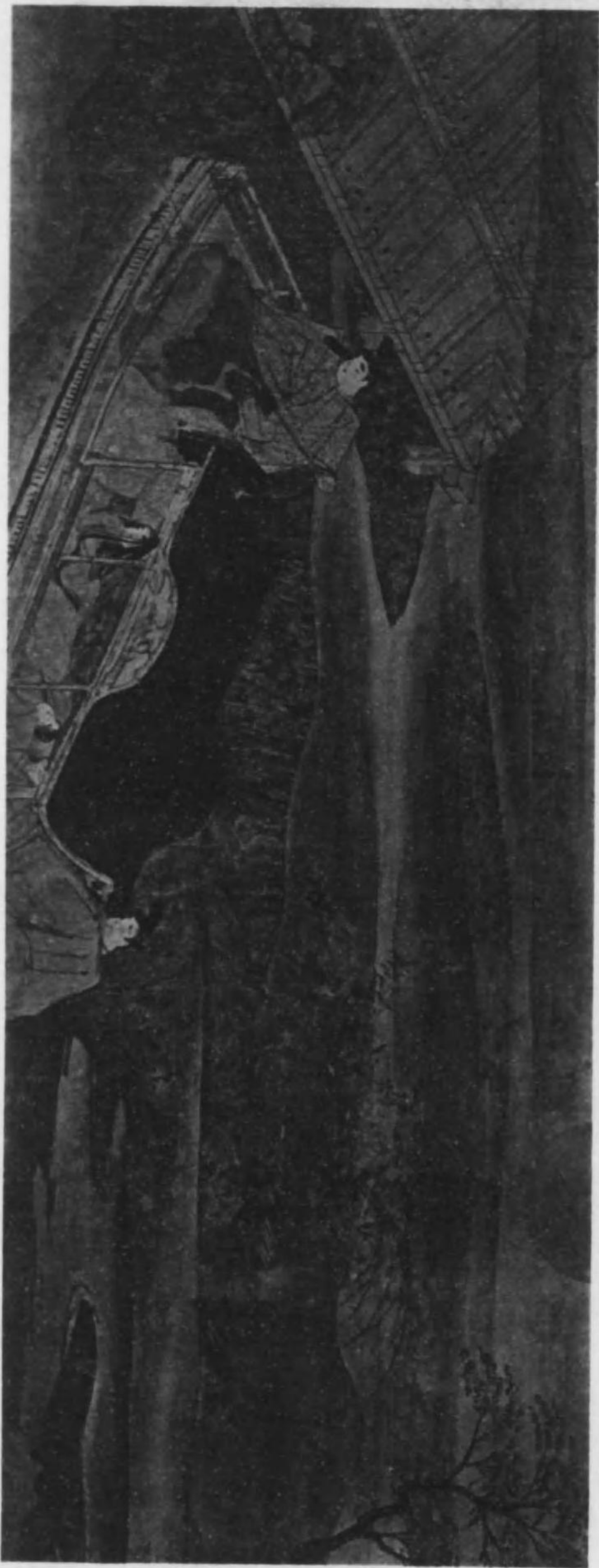
Table with columns for years (天長, 天保, 寛弘, 寛和, 寛仁, 寛平, 寛政, 寛文, 寛政, 寛文) and rows for events related to Murasaki Shikibu's life, such as her birth, marriage, and the completion of 'The Tale of Genji'.

【紫式部】紫式部の家は、開院左大臣多嗣六男の良門を遠祖とする名門であつた。同門の中には文人歌人として名ある者が少くなかつた。曾祖父兼輔は中納言と稱せられ、延喜時代には歌人として名あり、家系一巻を授けられてゐる。祖父の源正、その弟源正、叔父の爲時、皆優れた歌人で、その歌は「拾遺」以下の勅撰集に載せられてゐる。父爲時は歌人としてより、是等の詩文に長じ、又儒學の造詣が深く、當時の碩學文章博士菅原文時(字)に學んで、文名一世に高く、その作詩は「本朝源氏」に數十首載せられてゐる。また兄惟親も歌人として有名で、現在宮内省圖書寮に蔵されてゐる「惟親集」は、彼の歌を収録したもので、母は右馬頭藤原爲信の女で、冬嗣の一男長良を遠祖とする名家であり、式部の家系とは遠くその祖を同じくしてゐる。同祖は「藤原分限」及び「紫式部歌集」を綜合すると、兄三人と少くと一人の姉があつたらしい。而してこの長兄と次兄とは官に仕へ、三兄は出家して阿闍梨となつた。

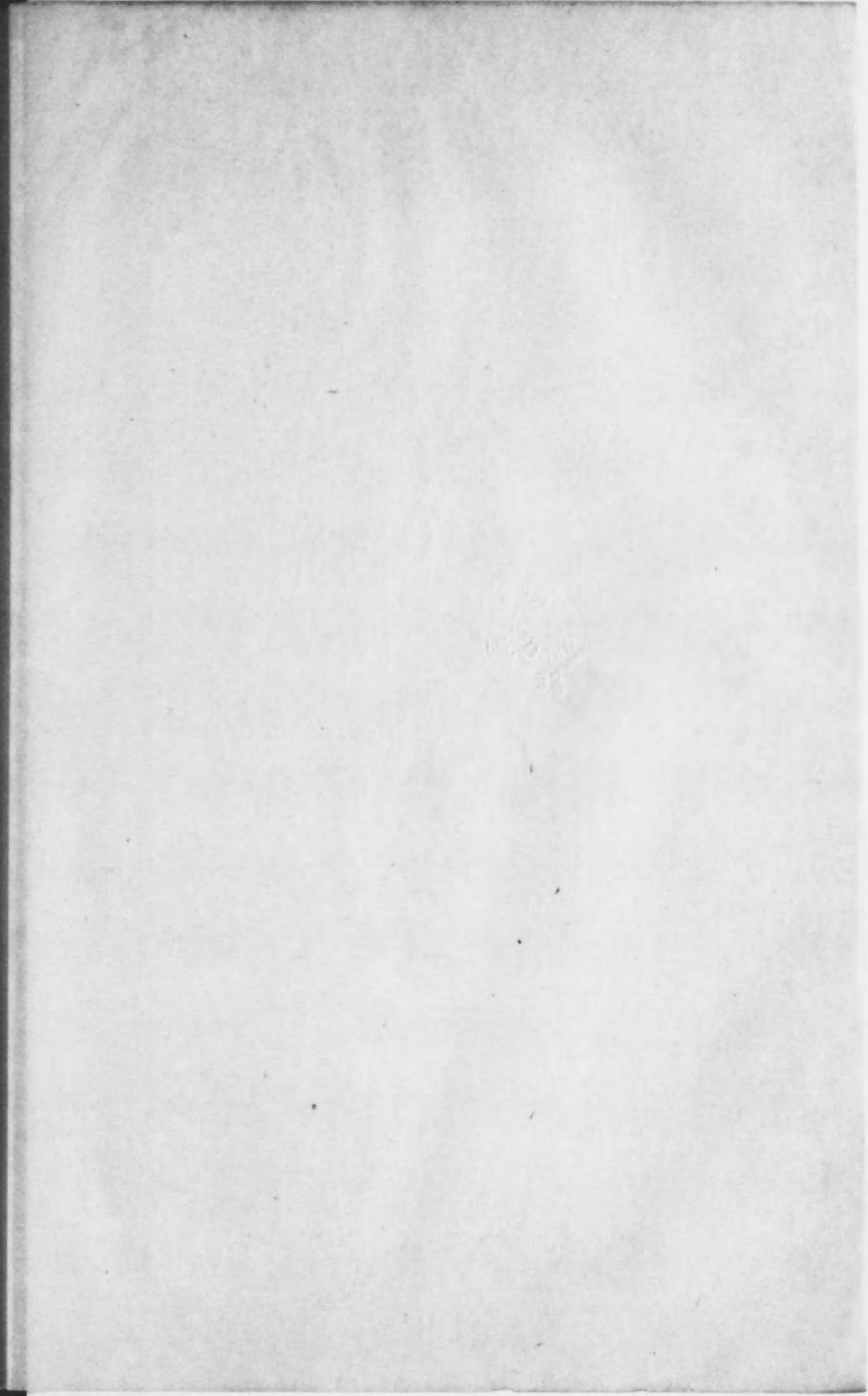
【開院】その幼少より聰明であつたことは、書に心入れたる親が「口惜し、男子にてもたらぬこそ幸なかりけれ」と常に歎いたといふ日記の記事を見ても知ることが出来る。家庭に於て相當早くから教養を受けたことも、同時にこの記事から推測される。源正に對する愛慕も亦十分で、家集及び日記によれば、母の傳授を求められたり、中宮に「白氏文集」の樂府を誦讀し奉つたり、文學以外に音楽の道にも秀でた才能を有つてゐた。なほ傳典の方面にも詳しくあつたが、これは兄の阿闍梨定遠の影響に負つたところが多かつたであらう。かうした遺傳と環境とが、彼女の慣らし、精選と相俟つて、他日源氏物語の大作を生む動因を既に孕んでゐたのである。式部は幼時何れかの宮か公家へ仕へたであらうとされてゐる。式部新考。又父爲時は泉州玉井に別荘があり、爲時はその地に度々遊んだ(本朝源氏集)ことがあつた。従つて式部も亦、河内和泉の邊に旅したことがあつたに相違ない。長徳二年十九歳の時には越前守として赴任して行く父に伴はれて、その秋旅に出たらしい(家集)。この頃である(家集)。越前への旅は、餘り楽しいものではなかつたらしい。道中の艱難に苦しみ、ひたすら都を戀ひ慕つてゐた(家集)。此處に滞在すること凡そ一ヶ月であつたが、さうして親しい友も出来ず、無言に沈んでゐた(家集)。彼女にとつて唯一の喜びは肥前の友との文通であつた(家集)。長徳三年の秋頃には、父爲時の任滿つるのを待ち兼ねて一人都へ歸つてゐる(家集)。この都へ歸るといふ少女の樂みか、同じ道中に苦難を感じさせなかつたものか、浮々とした心持を幾多の歌に残してゐる。

【家集】都に歸つて間もなく、四年の春頃からであらうか、後に夫となつた藤原宣孝との戀愛關係が始められた(家集)。式部は、初めのうちには宣孝の熱烈な求愛にも拘はらず、容易にそれを受け納れようとはしなかつた(家集)。これには種々の理由があつた。性格の相違、年齢の差、又宣孝に他に三四人の妾妻のあつた事などが數へ挙げ得られよう(家集)。宣孝も、その年の秋頃迄は、どちらともつかない關係が續けられて来たが、長保元年に至つては大分その仲が濃くなり、秋には結婚するに至つた。この頃宣孝は四十八歳位、式部は二十二歳位であつた。妻としての式部は、時としては宣孝の夜がれを救つた夜もあつたが、概して極めて平靜な静けい生活を樂しんだやうである。宣孝は後に於ける式部の追慕及び哀愁(家集)は、それを證して餘りがある。長保二年のことであらう。二人の間には女皇子が生まれた。この皇子は後冷泉天皇の御乳母感後の辨とある人で、後に正三位太皇太后高麗成章に降してから大貳三位と改めた。式部の結婚生活は、しかしあまりにも果敢なものであつた。結婚の翌々年、長保三年四月二十五日の夜、最早宣孝に死別しなければならなかつた(家集)。その時、式部の結婚生活は、その結婚生活が幸福であつただけに、その淋しきはまた深く切なるものがあつた(家集)。一度は、出家遁世せんとまで世の無常を果敢な心にもなつた。しかし幼い皇子をかへた現實を振り返つては、また其處に如何ともし難い自己を發見するのであつた。この生活の機微と亡き夫への大きな追慕とが、畢生の大作「源氏物語」製作の大きな動機の一つとなつてゐることは看過出来ない。爾後五十六年官仕へまでの

【源氏物語】の一部分は樂筆せられ、寛弘五年頃には、少くともその或る部分は既に流布してゐた(日記寛弘五年の條)。【式部】式部はまた上東門院に仕へる前に、屢同殿へ出仕へたといふ傳説がある(源朝野御式部日記)。第一對周(本朝源氏集)三年二月の條。據かにその當否は定かれないが、「源氏物語」に於ける宮廷生活の描寫及びそれ等と日記の記事の相似などから一概には否定も出来ない。寛弘四年十二月二十九日に年三十三歳で、初めて上東門院に出仕へた(日記寛弘四年十二月二十九日)。【式部】式部は、後冷泉天皇・中宮彰子及び道長夫妻等からは、かなり愛され、又同輩・殿上人からは、崇敬の念を以て眺められた(日記)。勿論目録と權謀とに満ちた當時の宮廷であつたから、同輩の嫉妬や敵愾心が相當式部を悩ましたことも事實である。宮廷に於ける理想生活の中にも、自らの境遇の狭さを知る式部は、常に住み愛む世界を持つた(日記)家集。しかし、この常に憂き生活にあつて、心から式部を喜ばすものは、朋輩少少の君との交情であつたらう(家集)。寛弘五年四月十三日中宮彰子は、御儀正御修法のために土御門殿へ出御される。式部もこれに隨つて土御門殿に出で、三十講に列席した(家集日記)。【紫式部日記】(別題)は、この頃のことから書かれてゐる。中宮の御座が近づくに従つて、人々はその準備に忙殺された。この頃の式部は、まだ新妻であつた(日記)。九月十一日に後一條天皇がお生れになり、九月十五日道長の御産養の日は、式部は祝歌を詠んでゐる(家集日記)。十月十六日の行幸に次いで、十一月一日には若宮(後一條天皇)の御五十日の祝儀が行はれた。その日の宴に附つた藤原公任が



（攝家督男田部）巻繪記日部式祭



元が祖父の供養のため萬行を命じた時、兩人が五日間に試したもので、同年五月兩人が註を加へた自筆本が毛利公蔵家にある。

むら竹

むら竹【著者】豊後守村【刊行】明治二十二年七月より同二十三年十一月に互る。【内容】明治十七年頃より同二十三年までの間に、著者が讀賣新聞・新小説・朝日新聞等に掲載した小説・傳記・紀行・隨筆等を集めたもの。室村著作全集の題がある。目次を左に掲げる。

【批評】この集が二十二年に出た、豊後守村の名は一般読者界に廣く知られるに至つた。むら竹は、大體十七年以降の小説を主として集めたもので、作家としての豊村は春樹屋よりも先輩であり、明治二十年前後に於ては文壇的には既に大家の地位を占めてゐた。更に「むら竹が文學史上興味ある研究対象となるのは、新聞小説の先驅たるいはゆる讀物から新聞小説への過渡期を示してゐる點である。即ち創作意識が全く稀薄で、舊作家の筆に成る讀物そつくりな小説と創作意識のやゝ強い小説らしい小説とが収まつてゐて、混濁たる變遷の跡が明瞭に看取される。集中小説そのものに就いていへば、叙述の輕妙と獨特のユーモアと、世故・人情の穿ちから成る一種の藝術美をもつてはゐるが、何れも單純なストオリイで、人物の描寫にも筋の運びにも根柢といふべきはなく、有りふれた市井の一項事をただ輕妙な文辭で描いたといふだけのものが多い。その雰囲気は根本に於て舊作家の世界のそれであり、新時代の意識は格別感じられない。教訓・勸善の意志は、理想を掲げるものでもない。ただ教養が該博であり、言辭が洗練・洗練を極めてゐるので、尋常の村山松根とは倫を異にしてゐる。

村山松根

村山松根【著者】歌人【家説】清遠樓【生没】文政五年九月薩摩に生れ、明治十五年一月四日、京都に没す。享年六十一。【居所】京都野栗院【附録】父は薩摩藩士、山崎謙三の第三子で、幼名三三之助、十八歳で木村氏を嗣ぎ仲之丞と改めた。嘉永二年同志と共に藩政を革新しようとしたが、事

露れて首謀者は自殺を命ぜられ、松根も兩年に及んだ。後、脱走して筑前に行き、黒田侯の庇護により幸うじて難を免れた。かくて彼は北條右門と號名し、京都に赴いて勤王諸士と交り、盛んに王事に奔走したが、西郷隆盛が大島に流された後、彼も大島に流された。召還された後は、村山實助と改名し、京都留守居副役となり、後、中川宮御所・近衛家用人となり、更に宮内省に仕へ、又聖本宮家令となつた。歌は香川景恒及び八田知紀に學び、晩年には京都華族歌道師となつた。家集は「忘貝」といひ、外に「靈島」の著がある。【歌風】知紀の流を承けて花鳥月を詠じた作が多く、知紀の温雅流麗に體な麗の加はつてゐるのをその特色とする。瀟々ぐりす人ならで誰か見むきさの小川の山吹の花など、その一例に擧げることが出来る。また情を持つる場合にも、「秋はてゝ今も情にあり實のありやなしやとふ人もなし」(其前)とさらへをけるもの如く、打ちつけに現はさないて餘情を含ませたものがある。【用字・金言】室生屋屋【魚沢洞】小説家・詩人【本名】照堂【別號】魚沢洞【出生】明治二十二年八月一日、別府市千町に生れた。【附録】父は山崎左衛門、世祿二百石を領した。初め赤井姓を、後、室生姓を繼いだ。父に就いて訓蒙を修めた以外には、これといふ學歴はない。十七歳の時、新選組に時を投じて兒玉花外に遇はれ、初めてその作が掲載された。後、【朱筆】誌上に一家として紹介されて詩壇に遊出し、二十九歳、自費を以て處女詩集「愛の詩集」を上梓した。詩友としては、萩原朝太郎と最も古くから交を結んでゐる。曾て雜誌「卓上噴水」を發行し、後に故山村喜島、萩原朝太郎等と共に詩集「感情」を發行し、次第に詩人として重きをなしたが、大正中期に至り小説家として轉身し、爾來今日に及んでゐる。【著作】(小説集)性に眼覺める頃○美しき米河○結婚の手記○香爐を焚む○葦草園○走馬燈○櫻○室生屋屋集○青い霧【詩集】愛の詩集○抒情小曲集○第二愛の詩集○忘春詩集○室生屋屋詩集○鶴等【作風】初期の小説は、「文章世界の泥濘の街裏にて」を初め、主に作家の窮乏時代を材料としたものが多く、陰鬱と汚濁に満ちた世界を、怪奇な形容法と重苦しい雰囲気で表現した特異な作家として注目され、「幼年時代」(大正八年八月、中央公論)が最も世界を喚んだ。昭和期に入つても、時代交遷の傾向から獨立して自己の特色を保つことに努めはなかつた。ただ次第に一家の風格を完成し、戀愛の心理交錯を分析した現實主義や独自の趣味から人生を眺めるやうな多角な題材を捉へると共に、文體に於ても、詩人的な清澄な點に成功しつつある。更に詩の方面を見れば、初めは寒ろ書々と情熱との野生兒として天眞の抒情詩、書き、次いでドストエフスキーに深く傾倒し、その詩にも教養と人道を思ふに至つたが、その後、詩風は又轉じて、自ら東洋枯淡の裡に生ずる氣を湛むに至つた。(千葉・北原)

室伏高信【著者】評論家【附録】明治二十三年、神奈川縣足柄下郡土肥村に生れた。順天中學校を卒へて明治大學に入學、半途にして退き、大正三年、時事新報記者となり、同五年、轉じて東京朝日新聞の政治部記者となつた。その後、新聞記者生活を離れ、大正八年、雜誌「批評」を創刊し、社會主義に關する研究、

め

明暗【小説】(作者)夏目漱石【發表】大正五年五月二十六日から東京大阪兩朝日新聞に連載し、百八十八回まで書いて作者は胃潰瘍のため筆を未完のまま遺された。【刊行】翌年一月、岩波書店、漱石全集第七卷、同普及版第十卷所収。

評論等を發表、傍ら「改造」その他に寄稿した。同九年、改造社海外特派員として歐米を歴遊、時々その通信文を「改造」誌上に載せた。歸朝後、漸く思想上に變化を生じ、露の玉璽等を上梓したが、アリア主義乃至東方主義に傾くに及び、「文明の没落」上に這る等を刊行した。更にその傾向が日本主義的となるに及び、「日本論」を公にし、又「日本はどうか」と題する長篇論文を公にして、日本文化の優越について闡明した。最近には「中外日報」に三澤村往後(の身邊)「三澤村日記」を連載し、省察的な讀物として讀書界に愛讀された。近時は讀賣新聞に執筆しつつある。著書頗る多く「アメリカ、其經濟と文明」(新英譯傳)二巻、高橋集「支那は起る等の著者」の外「ギルド社會主義」(社會主義批評)等がある。(高田)

すれつからしむおぼにたきつけ、おぼは津田の過去に對して疑念を懐くやうになつた。おぼは津田の味のお秀から聞き出さうとしたが成功しなかつた。事件は津田が手術のため入院してゐる頃から持ち上り、おぼの疑念は解けないまま津田は退院した。其處には清子と田は或る温泉場へ轉じた。おぼは清子と田は或る温泉場へ行つた。その處には津田は吉川夫人に會ひ、同夫人に勧められて出て行つたのである。二人は秋のなごやかな陽光に照らされた温泉宿の一室で對面した。【批評】これまでの作者のすべての作品は、この一篇の大成功の準備として用意されたものであつたと云つた人があつたが、考へ方に依つては、それが必ずしも誇張した言葉にも響かない。それほど集大成的な企圖的な野心的な作品である。もはや單なる浪漫的なものでもなく、また單なる寫實的なものでもなく、深大な批判的思想の基礎の上に立つて自由な想像力を働かせ、鋭い觀察と精確な描寫を以て、驚くべき大タペストリを織り上げようとした計畫してゐたことは、菊池七百四十五頁の大冊「おぼ」の全編の半ばを過ぎたに過ぎないものである。形の上から見てこの作品はかくの如く未完成ではあるが、併し「心」(別項)に於て自我主義の本質を解剖して人間さうひの思想に正當な理由を與へ、次の「運命」(別項)に於て再び自我主義を取り扱つて運命の如何ともする能はざる偉力に對する絶望を示した作者は、【明暗】に於て今一度自我主義を問題としたけれども、もはや作者は從つて人間の罪を責めず、必ずしも世間の罪を怒らず、より廣く寛容の心を以て、天がすべての罪惡を一視す

るが如く、自然があらゆる罪惡を包容するが如く、人間の自然を認めようとしてゐる態度が推知される。これは古來大藝術家が、最後に到達した神の如き態度である。相せぬ相争ふ人間同士の平野から飛騰して、神の世界に攀ち登つた時、人間はすべて憐むべき生物に見え、作者自身は、則天去私を體悟して、その悲壯なる最後の到達を説明しようとした。それが藝術的製作として遂に實現されないうちに死のために中断されたのは、實に惜しいもの餘りあるものである。(野上)

名家漫筆集【著者】隨筆一冊【編者】博文館【刊行】明治三十六年、續帝國文學第五十冊として刊行。【内容】編者が校訂の意味で、原本に多少の加筆した所のあるのはこの文庫の通弊である。所収九種、目次は左の如くである。

新しき作品である。御殿の段までを浄瑠璃に
整へたものが聖安永七年京都の竹本春太夫座
に上演された云々。後又「伊達屋阿彌屋」
（別項）を参照した浄瑠璃「御殿先代萩」が、松本
四高橋武平・吉田角丸によつて綴られ、天明
五年正月江戸結城座に上演された。又編まで
初め九段に綴られ、この作によつて「先代萩」
は後世に傳はつた。別系統のものに、伊達屋
阿彌屋が有る。（主代萩）

【参考】歌謡雑誌「御殿先代萩」○傳奇作書
現稿中西第一編○御殿千代萩解説（藤田）

【参考】「歌謡雑誌」二〇〇新小説（二〇一）
和布刈り「御神物の謡曲」を見よ。

め組の喧嘩「御神物の謡曲」を見よ。

【明倫雜誌】「刊行」明治十三年十二月二十五日
創刊。十五日二十五日の月二回発行。【解説】
當時の著者一方の種々たる春秋史論の組織
した佛蘭明倫雜誌の編輯雜誌で、その第一編
（第一巻）は、萬物の情を語り交際を厚うして天
理に背かざるを要し、諸子をして不知不識敬
神の意を起さしむるの大道なり。（中略）我社
長三森幹雄同志三名と謀り、官筆を経て明
治七年八月初明倫雜誌を設立す。而して専
ら人倫の道をかんと欲す云々」とある。
これによつてほぼ察せられる通り、その見解
極めて幼稚且つ見當違ひなもので、天保以來
の俗併をそのまま繼承して、その中に低級し
てゐるに過ぎない。従つて明治の佛文學に寄
與する所も極めて薄かつた。（伊藤）

【明倫雜誌】「漢學」を見よ。

【明六雜誌】「刊行」明治
七年三月創刊。八年十一月第四十三號にて廢
刊。【由来】明六社の編輯雜誌である。明六社
とは、明治六年森有造が主唱し西村茂樹津田

謙造・西岡・中村正直・加藤弘之・其作秋坪・福
澤諭・杉本一其作編輯等が賛同して開始し
た啓蒙的學術團體で、實際の成立は明治七年
二月であるが、發端が六年なので明六と名
づけた。社員は定時會合して、或ハ事理ヲ論
シ或ハ異聞ヲ談シ一ハ以テ學業ヲ研磨シ一ハ
以テ精神ヲ爽快ニシテ、さうしてその談論筆
記するところが積んで冊を成すに及んで、版
行して同好の士に頒つた。それが明六雜誌
である。【内容】文學技術物理事理等凡ソ人
ノ才能ヲ富マシ品行ヲ進ムルニ要ナル事
柄が多く、政談はしても、時局に關する
ものはない。啓蒙的學理論である。學者職分
論、文明開化論、政治論、經濟論、社會問題
論、風俗問題、女子問題、外人問題、國語國
字問題等、論者は可なり多岐多岐に亘り、比
較的忌なく著者を擧げて論じてゐる。論說
中には特に直接文學に關係するものは殆どな
い。【洋字】以テ國語ヲ書スルノ論（西岡）
「平假名ノ説」（森本）、「西學一編」（中村正
直）、「知説」（西岡）、「國學ヲ振興スベキノ説」
（藤田）等が注目すべきものがある。「西學
一編」は、西洋學史の消息も傳へてゐる第三十九
號。「知説」の第五（第二十五）には西洋文學
の體系が簡明に紹介され、詩劇の分類に
及んでゐる。但しこれを以て西洋文學乃至詩
學の知識を紹介した最初とするのは殆ど正
ではない。【影響】明六社の社員は、當時の
學界・思想界・教育界の最高權威を擁護してゐ
ただけに、その言説は文字通り「愚蒙ノ眼ヲ覺
シ天下ノ權柄ヲ立ツ」べき「千古不易ノ説」と
認められ、廟堂の爲政者も、民間有志も、青年

學徒も、その新知識の源泉をこゝに求めると
いふ有様で文化普及・士民啓蒙の功績は實に
渾大なものがあつた。これはこの雜誌が明治
七年二月から同八年二月までの一年間に二十
五號刊行され、各號が平均三千二百餘冊、合
して八萬餘冊も賣れた（社長の報告）といふ點
に照しても窺知される。（藤田）

【明六雜誌】「明六雜誌」を見よ。

【明和狂歌合】「明和狂歌合」見よ。上下
二巻。【編者】唐衣橋浦（成立）明和七
年【解説】歌合の體に倣ひ、萬歳・扇賣・猿曳・
松・赤良・橋本が詠んだ狂歌を左右にわかち、
上巻は内山椿軒、下巻は藤原宗因の評語を加
へたもので、且つ一題ごとに三輪花信齋の戲
筆があり、後に天明朝と稱へられた吾妻ふり
狂歌の一冊に纏まつた最初の歌集で、久しく
稿本のまま書肆青山堂の家に傳はつてゐたの
を、文化八年に至つて反故の中より發見し、
更に獨山人・山東京傳・四方歌垣・眞頼等の序
跋を加へ、寫本として狂歌仲間傳へた珍書
である。（野田）

【女敵高麗茶碗】「女敵高麗茶碗」見よ。浮世草子
【刊行】享保二年【譯本】徳川文藝叢書第一
【解説】出雲松江藩士榎井宗茂は、同家中古林
小左衛門の息女まつを愛し、三子を儲けて
平和に暮らしてゐた。正徳六年五月宗茂は太守
江戸表参府のお供を仰つかつたので、留守中
を慮り娘ため「十二歳の聖子」として當年二
十三歳の生田源次を迎へる事に約束が調ふ。
かくて宗茂はあと源次に頼んで江戸に發足
する。下女おきよは源次を見定め、文を遣つ

て逢瀬を契る。まつはおきよの落した文を
拾ひ、間違ひのないやうにと、おきよに無理
に夜伽を命じて自分の部屋に戻らないやうに
する。おきよは焦慮しながらも看護の役で
寝入つてしまふ。まつはおきよの居眠る様
子を見て、これ幸とおきよの部屋へ檢べに行
く。まつは相手おきよであるとは知らない
のである。源次はまつをとおきよと思つて源
次は、まつは始めて源次と知つて結であ
つたことを知つて大に憤慨し、以後かやうの
不身持はせぬといふ誓紙を書いてまつを預
ける。まつもその事を宗茂にも親達にも話
すまいと言ふ誓紙を書いて源次にも預ける。
下女のおきよはその有様を察見し、嫉妬から二
人の仲に不義があると邪推する。滿一年は過
ぎ、翌年の五月十八日宗茂は太守の供をして
江戸より歸る。宗茂は源次にまつを引水を勤
め、その後で守袋の中からまつをの興へた起
請を取出し、一間に入つて讀む。が不義の證
據も見えず、源次を呼んで仔細を尋ねようと
すると、源次は既に歸り、源次の歸つた跡にま
つも外出したといふので、愈々兩人に不義
の事があつたと思ひ、こゝかしこにまつと言
ひ立てる。一方まつは源次の出奔を知り、
引き戻さうとして後より一人追ひかけ、段々
説諭して歸路につく。ふと見ると向うより我
が家の定紋の附いた提灯をつけてくる人があ
る。片かげに立ち寄つて提灯をきくと、家來
ども五人が二人の不義の噂をし、宗茂は明朝
敵討ちに立つよしを語つてゆく。二人は胸を
轟かし、さうした騒ぎの中にかつと歸つたな
らば、何の證據もなく殺さるゝは必定、人を

と一語に絞帳に逃げこんだ。そこへ梅吉等が
歸つてきたので、言譯もたず、その上、胸に
一物のある源次がたまたまつけるので、里がは
りの松屋の家へ預けられる。（三巻）按摩道
女の女房おせつとの経おきは、伯母の體操を
見かねて伊勢屋の主人から五兩の金子をもら
つて歸つて来たので、道玄は主人與兵衛とわ
けがあるに違ひないといふ。伊勢屋へゆすりか
けたが、加賀高麗茶碗に見あらはされ、追ひ
かへされる。（四巻）女房おせつは、物
堅い武家であるため、今度よくじりをも許
さないで、おきよが覺悟をきめ、梅吉をも許
さないので、おきよが別れに来る。（五
巻）後梅をした五郎次が水遣橋までくと、
死神が出て川の中へ引つぱつてゆく。おきよ
も身投げしようとするが、子守女のおたみと
松屋とに引きとめられる。目影町松屋の内へ
頭をまるめて五郎次が詫言にきたので、おき
よの髪ひは晒れ、めでたくをさまる。（六巻）
血のついた布子を大が引きだしたので足がつか
き、百姓太次右衛門を殺したことが現はれて、
道玄は捕へられる。

【女敵高麗茶碗】「女敵高麗茶碗」見よ。浮世草子
【刊行】享保二年【譯本】徳川文藝叢書第一
【解説】出雲松江藩士榎井宗茂は、同家中古林
小左衛門の息女まつを愛し、三子を儲けて
平和に暮らしてゐた。正徳六年五月宗茂は太守
江戸表参府のお供を仰つかつたので、留守中
を慮り娘ため「十二歳の聖子」として當年二
十三歳の生田源次を迎へる事に約束が調ふ。
かくて宗茂はあと源次に頼んで江戸に發足
する。下女おきよは源次を見定め、文を遣つ

【女敵高麗茶碗】「女敵高麗茶碗」見よ。浮世草子
【刊行】享保二年【譯本】徳川文藝叢書第一
【解説】出雲松江藩士榎井宗茂は、同家中古林
小左衛門の息女まつを愛し、三子を儲けて
平和に暮らしてゐた。正徳六年五月宗茂は太守
江戸表参府のお供を仰つかつたので、留守中
を慮り娘ため「十二歳の聖子」として當年二
十三歳の生田源次を迎へる事に約束が調ふ。
かくて宗茂はあと源次に頼んで江戸に發足
する。下女おきよは源次を見定め、文を遣つ

【女敵高麗茶碗】「女敵高麗茶碗」見よ。浮世草子
【刊行】享保二年【譯本】徳川文藝叢書第一
【解説】出雲松江藩士榎井宗茂は、同家中古林
小左衛門の息女まつを愛し、三子を儲けて
平和に暮らしてゐた。正徳六年五月宗茂は太守
江戸表参府のお供を仰つかつたので、留守中
を慮り娘ため「十二歳の聖子」として當年二
十三歳の生田源次を迎へる事に約束が調ふ。
かくて宗茂はあと源次に頼んで江戸に發足
する。下女おきよは源次を見定め、文を遣つ

【女敵高麗茶碗】「女敵高麗茶碗」見よ。浮世草子
【刊行】享保二年【譯本】徳川文藝叢書第一
【解説】出雲松江藩士榎井宗茂は、同家中古林
小左衛門の息女まつを愛し、三子を儲けて
平和に暮らしてゐた。正徳六年五月宗茂は太守
江戸表参府のお供を仰つかつたので、留守中
を慮り娘ため「十二歳の聖子」として當年二
十三歳の生田源次を迎へる事に約束が調ふ。
かくて宗茂はあと源次に頼んで江戸に發足
する。下女おきよは源次を見定め、文を遣つ

【女敵高麗茶碗】「女敵高麗茶碗」見よ。浮世草子
【刊行】享保二年【譯本】徳川文藝叢書第一
【解説】出雲松江藩士榎井宗茂は、同家中古林
小左衛門の息女まつを愛し、三子を儲けて
平和に暮らしてゐた。正徳六年五月宗茂は太守
江戸表参府のお供を仰つかつたので、留守中
を慮り娘ため「十二歳の聖子」として當年二
十三歳の生田源次を迎へる事に約束が調ふ。
かくて宗茂はあと源次に頼んで江戸に發足
する。下女おきよは源次を見定め、文を遣つ

【女敵高麗茶碗】「女敵高麗茶碗」見よ。浮世草子
【刊行】享保二年【譯本】徳川文藝叢書第一
【解説】出雲松江藩士榎井宗茂は、同家中古林
小左衛門の息女まつを愛し、三子を儲けて
平和に暮らしてゐた。正徳六年五月宗茂は太守
江戸表参府のお供を仰つかつたので、留守中
を慮り娘ため「十二歳の聖子」として當年二
十三歳の生田源次を迎へる事に約束が調ふ。
かくて宗茂はあと源次に頼んで江戸に發足
する。下女おきよは源次を見定め、文を遣つ

【女敵高麗茶碗】「女敵高麗茶碗」見よ。浮世草子
【刊行】享保二年【譯本】徳川文藝叢書第一
【解説】出雲松江藩士榎井宗茂は、同家中古林
小左衛門の息女まつを愛し、三子を儲けて
平和に暮らしてゐた。正徳六年五月宗茂は太守
江戸表参府のお供を仰つかつたので、留守中
を慮り娘ため「十二歳の聖子」として當年二
十三歳の生田源次を迎へる事に約束が調ふ。
かくて宗茂はあと源次に頼んで江戸に發足
する。下女おきよは源次を見定め、文を遣つ

【女敵高麗茶碗】「女敵高麗茶碗」見よ。浮世草子
【刊行】享保二年【譯本】徳川文藝叢書第一
【解説】出雲松江藩士榎井宗茂は、同家中古林
小左衛門の息女まつを愛し、三子を儲けて
平和に暮らしてゐた。正徳六年五月宗茂は太守
江戸表参府のお供を仰つかつたので、留守中
を慮り娘ため「十二歳の聖子」として當年二
十三歳の生田源次を迎へる事に約束が調ふ。
かくて宗茂はあと源次に頼んで江戸に發足
する。下女おきよは源次を見定め、文を遣つ

【女敵高麗茶碗】「女敵高麗茶碗」見よ。浮世草子
【刊行】享保二年【譯本】徳川文藝叢書第一
【解説】出雲松江藩士榎井宗茂は、同家中古林
小左衛門の息女まつを愛し、三子を儲けて
平和に暮らしてゐた。正徳六年五月宗茂は太守
江戸表参府のお供を仰つかつたので、留守中
を慮り娘ため「十二歳の聖子」として當年二
十三歳の生田源次を迎へる事に約束が調ふ。
かくて宗茂はあと源次に頼んで江戸に發足
する。下女おきよは源次を見定め、文を遣つ

【女敵高麗茶碗】「女敵高麗茶碗」見よ。浮世草子
【刊行】享保二年【譯本】徳川文藝叢書第一
【解説】出雲松江藩士榎井宗茂は、同家中古林
小左衛門の息女まつを愛し、三子を儲けて
平和に暮らしてゐた。正徳六年五月宗茂は太守
江戸表参府のお供を仰つかつたので、留守中
を慮り娘ため「十二歳の聖子」として當年二
十三歳の生田源次を迎へる事に約束が調ふ。
かくて宗茂はあと源次に頼んで江戸に發足
する。下女おきよは源次を見定め、文を遣つ

【女敵高麗茶碗】「女敵高麗茶碗」見よ。浮世草子
【刊行】享保二年【譯本】徳川文藝叢書第一
【解説】出雲松江藩士榎井宗茂は、同家中古林
小左衛門の息女まつを愛し、三子を儲けて
平和に暮らしてゐた。正徳六年五月宗茂は太守
江戸表参府のお供を仰つかつたので、留守中
を慮り娘ため「十二歳の聖子」として當年二
十三歳の生田源次を迎へる事に約束が調ふ。
かくて宗茂はあと源次に頼んで江戸に發足
する。下女おきよは源次を見定め、文を遣つ

【女敵高麗茶碗】「女敵高麗茶碗」見よ。浮世草子
【刊行】享保二年【譯本】徳川文藝叢書第一
【解説】出雲松江藩士榎井宗茂は、同家中古林
小左衛門の息女まつを愛し、三子を儲けて
平和に暮らしてゐた。正徳六年五月宗茂は太守
江戸表参府のお供を仰つかつたので、留守中
を慮り娘ため「十二歳の聖子」として當年二
十三歳の生田源次を迎へる事に約束が調ふ。
かくて宗茂はあと源次に頼んで江戸に發足
する。下女おきよは源次を見定め、文を遣つ

【女敵高麗茶碗】「女敵高麗茶碗」見よ。浮世草子
【刊行】享保二年【譯本】徳川文藝叢書第一
【解説】出雲松江藩士榎井宗茂は、同家中古林
小左衛門の息女まつを愛し、三子を儲けて
平和に暮らしてゐた。正徳六年五月宗茂は太守
江戸表参府のお供を仰つかつたので、留守中
を慮り娘ため「十二歳の聖子」として當年二
十三歳の生田源次を迎へる事に約束が調ふ。
かくて宗茂はあと源次に頼んで江戸に發足
する。下女おきよは源次を見定め、文を遣つ

【女敵高麗茶碗】「女敵高麗茶碗」見よ。浮世草子
【刊行】享保二年【譯本】徳川文藝叢書第一
【解説】出雲松江藩士榎井宗茂は、同家中古林
小左衛門の息女まつを愛し、三子を儲けて
平和に暮らしてゐた。正徳六年五月宗茂は太守
江戸表参府のお供を仰つかつたので、留守中
を慮り娘ため「十二歳の聖子」として當年二
十三歳の生田源次を迎へる事に約束が調ふ。
かくて宗茂はあと源次に頼んで江戸に發足
する。下女おきよは源次を見定め、文を遣つ

【女敵高麗茶碗】「女敵高麗茶碗」見よ。浮世草子
【刊行】享保二年【譯本】徳川文藝叢書第一
【解説】出雲松江藩士榎井宗茂は、同家中古林
小左衛門の息女まつを愛し、三子を儲けて
平和に暮らしてゐた。正徳六年五月宗茂は太守
江戸表参府のお供を仰つかつたので、留守中
を慮り娘ため「十二歳の聖子」として當年二
十三歳の生田源次を迎へる事に約束が調ふ。
かくて宗茂はあと源次に頼んで江戸に發足
する。下女おきよは源次を見定め、文を遣つ

【女敵高麗茶碗】「女敵高麗茶碗」見よ。浮世草子
【刊行】享保二年【譯本】徳川文藝叢書第一
【解説】出雲松江藩士榎井宗茂は、同家中古林
小左衛門の息女まつを愛し、三子を儲けて
平和に暮らしてゐた。正徳六年五月宗茂は太守
江戸表参府のお供を仰つかつたので、留守中
を慮り娘ため「十二歳の聖子」として當年二
十三歳の生田源次を迎へる事に約束が調ふ。
かくて宗茂はあと源次に頼んで江戸に發足
する。下女おきよは源次を見定め、文を遣つ

【女敵高麗茶碗】「女敵高麗茶碗」見よ。浮世草子
【刊行】享保二年【譯本】徳川文藝叢書第一
【解説】出雲松江藩士榎井宗茂は、同家中古林
小左衛門の息女まつを愛し、三子を儲けて
平和に暮らしてゐた。正徳六年五月宗茂は太守
江戸表参府のお供を仰つかつたので、留守中
を慮り娘ため「十二歳の聖子」として當年二
十三歳の生田源次を迎へる事に約束が調ふ。
かくて宗茂はあと源次に頼んで江戸に發足
する。下女おきよは源次を見定め、文を遣つ

【女敵高麗茶碗】「女敵高麗茶碗」見よ。浮世草子
【刊行】享保二年【譯本】徳川文藝叢書第一
【解説】出雲松江藩士榎井宗茂は、同家中古林
小左衛門の息女まつを愛し、三子を儲けて
平和に暮らしてゐた。正徳六年五月宗茂は太守
江戸表参府のお供を仰つかつたので、留守中
を慮り娘ため「十二歳の聖子」として當年二
十三歳の生田源次を迎へる事に約束が調ふ。
かくて宗茂はあと源次に頼んで江戸に發足
する。下女おきよは源次を見定め、文を遣つ

【女敵高麗茶碗】「女敵高麗茶碗」見よ。浮世草子
【刊行】享保二年【譯本】徳川文藝叢書第一
【解説】出雲松江藩士榎井宗茂は、同家中古林
小左衛門の息女まつを愛し、三子を儲けて
平和に暮らしてゐた。正徳六年五月宗茂は太守
江戸表参府のお供を仰つかつたので、留守中
を慮り娘ため「十二歳の聖子」として當年二
十三歳の生田源次を迎へる事に約束が調ふ。
かくて宗茂はあと源次に頼んで江戸に發足
する。下女おきよは源次を見定め、文を遣つ

【女敵高麗茶碗】「女敵高麗茶碗」見よ。浮世草子
【刊行】享保二年【譯本】徳川文藝叢書第一
【解説】出雲松江藩士榎井宗茂は、同家中古林
小左衛門の息女まつを愛し、三子を儲けて
平和に暮らしてゐた。正徳六年五月宗茂は太守
江戸表参府のお供を仰つかつたので、留守中
を慮り娘ため「十二歳の聖子」として當年二
十三歳の生田源次を迎へる事に約束が調ふ。
かくて宗茂はあと源次に頼んで江戸に發足
する。下女おきよは源次を見定め、文を遣つ

【女敵高麗茶碗】「女敵高麗茶碗」見よ。浮世草子
【刊行】享保二年【譯本】徳川文藝叢書第一
【解説】出雲松江藩士榎井宗茂は、同家中古林
小左衛門の息女まつを愛し、三子を儲けて
平和に暮らしてゐた。正徳六年五月宗茂は太守
江戸表参府のお供を仰つかつたので、留守中
を慮り娘ため「十二歳の聖子」として當年二
十三歳の生田源次を迎へる事に約束が調ふ。
かくて宗茂はあと源次に頼んで江戸に發足
する。下女おきよは源次を見定め、文を遣つ

【女敵高麗茶碗】「女敵高麗茶碗」見よ。浮世草子
【刊行】享保二年【譯本】徳川文藝叢書第一
【解説】出雲松江藩士榎井宗茂は、同家中古林
小左衛門の息女まつを愛し、三子を儲けて
平和に暮らしてゐた。正徳六年五月宗茂は太守
江戸表参府のお供を仰つかつたので、留守中
を慮り娘ため「十二歳の聖子」として當年二
十三歳の生田源次を迎へる事に約束が調ふ。
かくて宗茂はあと源次に頼んで江戸に發足
する。下女おきよは源次を見定め、文を遣つ

【女敵高麗茶碗】「女敵高麗茶碗」見よ。浮世草子
【刊行】享保二年【譯本】徳川文藝叢書第一
【解説】出雲松江藩士榎井宗茂は、同家中古林
小左衛門の息女まつを愛し、三子を儲けて
平和に暮らしてゐた。正徳六年五月宗茂は太守
江戸表参府のお供を仰つかつたので、留守中
を慮り娘ため「十二歳の聖子」として當年二
十三歳の生田源次を迎へる事に約束が調ふ。
かくて宗茂はあと源次に頼んで江戸に發足
する。下女おきよは源次を見定め、文を遣つ

【女敵高麗茶碗】「女敵高麗茶碗」見よ。浮世草子
【刊行】享保二年【譯本】徳川文藝叢書第一
【解説】出雲松江藩士榎井宗茂は、同家中古林
小左衛門の息女まつを愛し、三子を儲けて
平和に暮らしてゐた。正徳六年五月宗茂は太守
江戸表参府のお供を仰つかつたので、留守中
を慮り娘ため「十二歳の聖子」として當年二
十三歳の生田源次を迎へる事に約束が調ふ。
かくて宗茂はあと源次に頼んで江戸に發足
する。下女おきよは源次を見定め、文を遣つ

【女敵高麗茶碗】「女敵高麗茶碗」見よ。浮世草子
【刊行】享保二年【譯本】徳川文藝叢書第一
【解説】出雲松江藩士榎井宗茂は、同家中古林
小左衛門の息女まつを愛し、三子を儲けて
平和に暮らしてゐた。正徳六年五月宗茂は太守
江戸表参府のお供を仰つかつたので、留守中
を慮り娘ため「十二歳の聖子」として當年二
十三歳の生田源次を迎へる事に約束が調ふ。
かくて宗茂はあと源次に頼んで江戸に發足
する。下女おきよは源次を見定め、文を遣つ

【女敵高麗茶碗】「女敵高麗茶碗」見よ。浮世草子
【刊行】享保二年【譯本】徳川文藝叢書第一
【解説】出雲松江藩士榎井宗茂は、同家中古林
小左衛門の息女まつを愛し、三子を儲けて
平和に暮らしてゐた。正徳六年五月宗茂は太守
江戸表参府のお供を仰つかつたので、留守中
を慮り娘ため「十二歳の聖子」として當年二
十三歳の生田源次を迎へる事に約束が調ふ。
かくて宗茂はあと源次に頼んで江戸に發足
する。下女おきよは源次を見定め、文を遣つ

【女敵高麗茶碗】「女敵高麗茶碗」見よ。浮世草子
【刊行】享保二年【譯本】徳川文藝叢書第一
【解説】出雲松江藩士榎井宗茂は、同家中古林
小左衛門の息女まつを愛し、三子を儲けて
平和に暮らしてゐた。正徳六年五月宗茂は太守
江戸表参府のお供を仰つかつたので、留守中
を慮り娘ため「十二歳の聖子」として當年二
十三歳の生田源次を迎へる事に約束が調ふ。
かくて宗茂はあと源次に頼んで江戸に發足
する。下女おきよは源次を見定め、文を遣つ

【女敵高麗茶碗】「女敵高麗茶碗」見よ。浮世草子
【刊行】享保二年【譯本】徳川文藝叢書第一
【解説】出雲松江藩士榎井宗茂は、同家中古林
小左衛門の息女まつを愛し、三子を儲けて
平和に暮らしてゐた。正徳六年五月宗茂は太守
江戸表参府のお供を仰つかつたので、留守中
を慮り娘ため「十二歳の聖子」として當年二
十三歳の生田源次を迎へる事に約束が調ふ。
かくて宗茂はあと源次に頼んで江戸に發足
する。下女おきよは源次を見定め、文を遣つ

【女敵高麗茶碗】「女敵高麗茶碗」見よ。浮世草子
【刊行】享保二年【譯本】徳川文藝叢書第一
【解説】出雲松江藩士榎井宗茂は、同家中古林
小左衛門の息女まつを愛し、三子を儲けて
平和に暮らしてゐた。正徳六年五月宗茂は太守
江戸表参府のお供を仰つかつたので、留守中
を慮り娘ため「十二歳の聖子」として當年二
十三歳の生田源次を迎へる事に約束が調ふ。
かくて宗茂はあと源次に頼んで江戸に發足
する。下女おきよは源次を見定め、文を遣つ

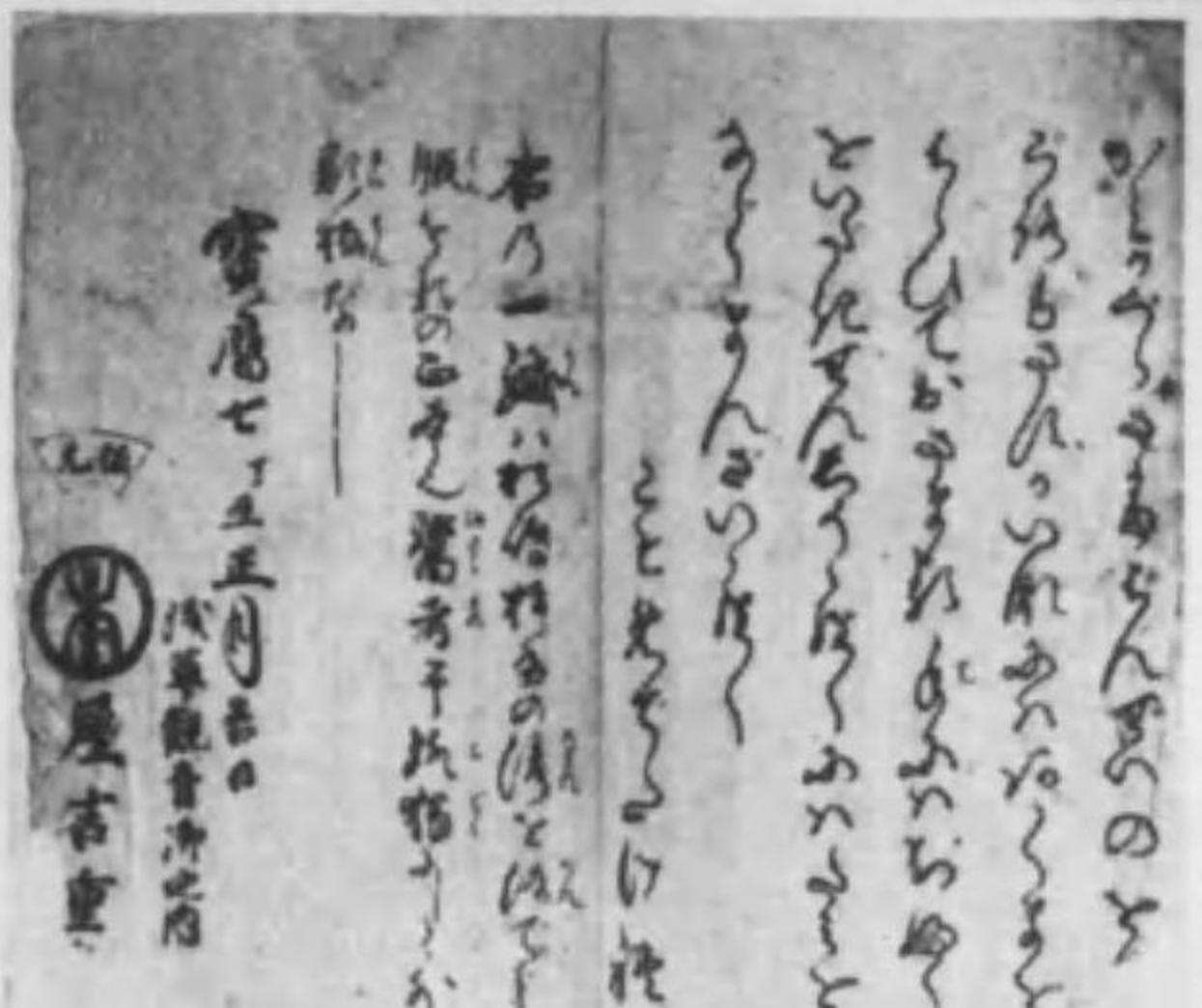
【女敵高麗茶碗】「女敵高麗茶碗」見よ。浮世草子
【刊行】享保二年【譯本】徳川文藝叢書第一
【解説】出雲松江藩士榎井宗茂は、同家中古林
小左衛門の息女まつを愛し、三子を儲けて
平和に暮らしてゐた。正徳六年五月宗茂は太守
江戸表参府のお供を仰つかつたので、留守中
を慮り娘ため「十二歳の聖子」として當年二
十三歳の生田源次を迎へる事に約束が調ふ。
かくて宗茂はあと源次に頼んで江戸に發足
する。下女おきよは源次を見定め、文を遣つ

【女敵高麗茶碗】「女敵高麗茶碗」見よ。浮世草子
【刊行】享保二年【譯本】徳川文藝叢書第一
【解説】出雲松江藩士榎井宗茂は、同家中古林
小左衛門の息女まつを愛し、三子を儲けて
平和に暮らしてゐた。正徳六年五月宗茂は太守
江戸表参府のお供を仰つかつたので、留守中
を慮り娘ため「十二歳の聖子」として當年二
十三歳の生田源次を迎へる事に約束が調ふ。
かくて宗茂はあと源次に頼んで江戸に發足
する。下女おきよは源次を見定め、文を遣つ

【女敵高麗茶碗】「女敵高麗茶碗」見よ。浮世草子
【刊行】享保二年【譯本】徳川文藝叢書第一
【解説】出雲松江藩士榎井宗茂は、同家中古林
小左衛門の息女まつを愛し、三子を儲けて
平和に暮らしてゐた。正徳六年五月宗茂は太守
江戸表参府のお供を仰つかつたので、留守中
を慮り娘ため「十二歳の聖子」として當年二
十三歳の生田源次を迎へる事に約束が調ふ。
かくて宗茂はあと源次に頼んで江戸に發足
する。下女おきよは源次を見定め、文を遣つ

女里彌壽豊年蔵

一冊【書名】歌謡曲の豊富なる意を寓し、且つめりやすの豊采する意味したものであ



門太忍名 羽衣の曲 那島 陸丹前 山崎海次 兵衛 新藤風 吉原丹前 朝岡の鐘 新藤間 帶

るものには、振柄形の貼外題あり、「免里彌壽

今ほもてはやす者もなきゆへにや、時あた

四篇本(金澤文庫所蔵、江戸歌謡研究會三編別冊第

と刊記があり、半紙版部付本、銅々の摺古本

の六篇を増加した。これも増補目目によつて

【註本】輸入狂言本として、京八文字屋八左

度の浦)日本に佛法流布の目的を以て、高戸

つて賜はつた御酒には毒があつたが、満潮の

望一 佛人(姓)杉木氏(杉木氏)

【註本】輸入狂言本として、京八文字屋八左

二と推稱し又其功其の功の下に在らず... 孟子の思想を論じて、仁を説く... 孟子の思想を論じて、仁を説く...

孟子の思想を論じて、仁を説く... 孟子の思想を論じて、仁を説く... 孟子の思想を論じて、仁を説く...

孟子の思想を論じて、仁を説く... 孟子の思想を論じて、仁を説く... 孟子の思想を論じて、仁を説く...

孟子の思想を論じて、仁を説く... 孟子の思想を論じて、仁を説く... 孟子の思想を論じて、仁を説く...

孟子の思想を論じて、仁を説く... 孟子の思想を論じて、仁を説く... 孟子の思想を論じて、仁を説く...

孟子の思想を論じて、仁を説く... 孟子の思想を論じて、仁を説く... 孟子の思想を論じて、仁を説く...

孟子の思想を論じて、仁を説く... 孟子の思想を論じて、仁を説く... 孟子の思想を論じて、仁を説く...

孟子の思想を論じて、仁を説く... 孟子の思想を論じて、仁を説く... 孟子の思想を論じて、仁を説く...

料紙は横紙、引合、奉書、杉原など、その人に依り色々であるが、普通横に半折した折紙を用ひ、時に野文のこともある。左に進上目録の數例を示す。

Table with columns for recipient names (e.g., 御太刀, 御馬) and their corresponding items or amounts (e.g., 一、一定, 五千疋).

もじ

右の進上目録の類に、寄進目録と云ふものもある。例へば、

Table listing various items and their quantities, such as '御馬' (horses) and '御太刀' (swords).

九四八

次に藝術相傳免許の場合の免許目録は、武藝百藝を始め、茶道、華道、楽曲その他諸道に於て、その道の進歩の深遠に従ひ、師匠より弟子に對して傳授を爲す場合に、證據として授くるものである。印可、切紙と云ふも同じやうな類である。現今では切紙を初段、次を目録、次をゆるし、又免許、或は傳授、最後を傳授印可と名付けられたものに、檢非違使の評定目録や武家の奉書目録など色々あるが、今總て省略に従ふこととする。

文字

文字の「名稱」(name) writing (書) die Schrift, (德) Recharakter (解) 通例、文字と稱するものは、線や點の約束の組合せであつて、言語を代表するものである。この意味で符號と區別する。符號とは句讀點、數學、化學の符號等の如きものをいひ、線や點の約束の組合せであるといふことは、文字と同じであるが、直接に意義を代表する點で違ふ。漢字の如きは音聲を表はすものであるが、その音聲が表はす一定の意義までも字形に結び附いてゐる。例へば「加」といふ字形は、加の音を表はすと共に「加」の如き別の意義の語には、同じ加の字を使はない。假名の「か」は、いかなる意義でも加ならば皆この字を使ふことが出来る。この點で漢字は符號の性質を帯びてゐるが、例へば「か」は「加」の意義のみを表はし、加の音は表はさないから、純粹の符號であつてこの點で漢字「加」と異なる。

次に音聲代表の習慣を考へるに、代表とは文字表象が音聲表象と適合する事實をいふ。音聲表象は音聲が意義を表はすために、慣習的に定まつた抽象的性質を帯びてゐる。各國語

の文字習慣を調査するに、音聲の表意的性質と文字の視覚的性質との比較が重要な問題となる。我が假名に音聲を表はす字形がないこと、英語の sound の如くアクセントを表はす形のないこと、やうな不足性、又一字多音、多音一字の如き不規則性の發見せられた例が多い。その不規則性は音聲の歴史、音聲の變化に伴つて字形の習慣が變化しないため、或は外國の文字を採用する結果、外國の習慣と違ふものを表はすために生ずる。又音聲としては區別あるものも文字として區別しないこと、例へば m n r 等の音を同じ「ん」字で表はし、「二杯」「斗」「二箇」「二冊」「二尺」の如く、所謂促音は異なる音であるが、これを同一文字で表はすのも不規則性の一様である。又視覚的形態としては別々のものであるが、同一音聲を代表するがため「同じ文字」と認められる例もある。例「と」「三」「ト」等。文字が實地に發音された具體的音聲の要素全部を代表し得ないことは言ふまでもない。視覚的形態が音聲又は意義を代表する習慣により、表音文字、單音文字、單音文字、單音文字等の名で呼ばれる區別が生ずる。表音文字はエジプトの象形文字、支那古代の象形文字等の如きをいふ。併しこれは、形態が直接に意義を表はし、音聲とは直接に結び附いてゐない點に於て符號の類に屬する。但し從來はこれを「象形文字」と稱して來た。單音文字は漢字の如く或る一定の意義を伴つた音聲を表はすものをいふ。音聲文字は母音子音の連続した音節時には母音子音の連綴を表現する。假名、漢字、漢字を音聲として使つた場合(例、新文字)等の如きをいふ。單音文字は西洋の a b c 等の如く、一つの母音、子音を別々に表はす。勿

もじ

論一つの母音子音とは、常識的にいふのである。音聲學上嚴格に考へれば、一つの單音とは何であるかといふことは甚だ困難な問題となる。音節文字、單音文字と總稱して表音文字といふことがある。(音聲學で使はる音聲學のことは別項参照)

【文字の具體性】上に記したのは、すべて文字の抽象的方面(心理的)に於ては文字表象の方面である。これと區別したる文字の具體性も重要な事實である。具體文字は必ず或る物質として存在する。紙、布、皮、木板、金屬、岩石、泥板、木、蠟、等。これに他の繪具、墨、インキの類を塗るか、物質を彫刻するがして文字形態を作る。特殊な場合には光をも用ひ、又手帳信箋の如く運動によつて字形を示す。これを造る器具として、毛筆、羽毛筆、鉛筆、金剛筆、尖つた棒、刀等があり、方法としては手を以て一々書き記すこと、器械を以て印刷すること等がある。又文字は、(一)これを書く人とその書く作用(書寫)、(二)讀む人と讀む作用(解讀)との二面がある。(一)の方は人の心にある思想、感情を發表するが目的で、先づ言語表象を回想し、その中に含まれたる音聲表象及びこれに適合する文字表象に基づいて、手の筋肉を有意的に動かして具體文字を作る。(二)の方は先づ具體文字の視覚的形態を知覺し、文字表象を想起してこれを判別し、これに適合する音聲表象を想起し、解讀に達する。この途中に於て音聲表象を想起した時、これに基づいて音聲器官を動かして發音することを通例、音聲又は發音と稱する。また書記作用の際に、或る思想、感情を發表するため、音聲言語を單に想起し、これに伴ふ文字を書く場

合と、他人が實地に使つた音聲言語を總括して、これを文字によつて「筆記」する場合とある。何れも思想の動きが速いため、及び音聲の發せられるのが速いため、書記運動の速度といふことが問題になる。所謂筆記文字は前記(音聲言語を總括)のため案出されたものである。書記作用と讀む作用と共に屢々繰返すことによつて熟練を生じ、書記に於ては思想や感情の起ると共に、直ちに手が動いて文字を書く。讀むに於ては具體文字が目につくれば直ちに意識が浮び、中間の段階は意識の中心から遠ざかる。隨つて適合の習慣に多少の變化を生じ、例へば英語の單語の如く、若干子音の連続した一單語が一塊の形態となつて、この視覚的形態に意義適合が行はれる。漢字の如きも然り。かくなれば結果に於て文字は符號と同性質に歸する。更に文字形態の具體性は文字の藝術性的問題と接觸する。書記運動の熟練より巧みな字、美しい字といふ評價を生じ、巧拙に拘らず、その文字はその人の性格までも現はすといはれる。巧みな美人なる文字を書くに習熟した人は、その人の人格と相俟つて能書家と稱せられ、延いては書道(書)と名づく藝術の一部門を作る。

九四九

信濃看板(色光形)等。附、象徴的に意味を伴ふもの。...

【著者】J. Taylor: Alphabet. C. Paulmann: Das Buch der Schrift. 1880. II. Dehlich: Geschichte der altnordischen Schriftschreibformen. 1928. II. Jensen, Geschichte der Schrift. 1925. P. Kernel: La langue écrite. 1927.

縦手摺書木偶

【著者】藤原清彦。【書名】藤原清彦。【書名】藤原清彦。...

【著者】戸田茂樹全集十八巻がある。【書名】戸田茂樹全集十八巻がある。...

ち、破門は興次破門と改名、染丸を吉三と改め、...

【著者】戸田茂樹全集十八巻がある。【書名】戸田茂樹全集十八巻がある。...

縦手摺書木偶

【著者】藤原清彦。【書名】藤原清彦。【書名】藤原清彦。...

【著者】戸田茂樹全集十八巻がある。【書名】戸田茂樹全集十八巻がある。...

【著者】戸田茂樹全集十八巻がある。【書名】戸田茂樹全集十八巻がある。...

【著者】戸田茂樹全集十八巻がある。【書名】戸田茂樹全集十八巻がある。...

【著者】戸田茂樹全集十八巻がある。【書名】戸田茂樹全集十八巻がある。...

【著者】戸田茂樹全集十八巻がある。【書名】戸田茂樹全集十八巻がある。...

總持の人も、藤原朝集、越中權井城主... 藤原朝集の末といへば、武家名譽、明かでない。...

點の時の句を特に感して、これは權井が句... であらう、どこに隠れ住むかと云つて残念が...

尹等に随つて白河院に行つたり、八幡に詣で... たりしてゐる。應保三年大藏少丞に任ぜられ、...

味ある露骨な歌が多い。例へば、男となりて侍る女の程もたごころ人にあひ... ぬき置きてつかはしける...

詩文に關しては不明。ただ大江朝綱等に私淑... してゐたことが知られるのみである。...

らうといはれる。この外、勳賞集には、金葉詞... 雅子、新古今、新勳賞等凡そ百餘首が見え、...

彼の判例にも、この傾向が顯著である。なほ... その歌論が詩論から出てゐることも注意すべ...

文化八年(西七二)六月二十八日歿す。享年八... 十八(法名)心性院藤原朝集(別號)...



〔抄集〕藤原朝集和漢詩集



(朝集判人山) 豐自撰木の元

【著書】千五百冊を下らないといはれてゐるが、現存するものは大抵、近藤正壽全集に収められてゐる。○清俗紀聞八冊○安南紀略三冊○天川紀略一冊○外國通書略十二巻○夷狄類典凡三百冊○邊要分界圖考十五巻○いざりす紀略一冊○紅毛書五冊○金銀圖録七冊○寶貨考三十冊○右文故事三十巻○外蕃通書(前編)十巻○外蕃通書三十巻○正書書考三冊○同編史部及歴史部五冊○同後集三冊○金澤文庫考一冊○江州本草凡三十巻○蝦夷夷議一冊○富士の朝二冊○近藤正壽全集一冊○續蝦夷紀三冊

【業績】山本北山の門に入つて漢學を修め、十七歳の時、同學の士と白山義塾を起して自ら教授した。初めて出仕した時から家藏類典の編纂、日本分國及び地誌の編纂に従事したが、當時は外國船が日本近海に出没し、外交上多事多端の時であり、外國の知識を必要とした時であつたから、守重は外國地誌の類を編纂して幕府に上り、又從來の外交關係を調査した「外蕃通書」その他をも作つた。又蝦夷地の取締りについては、遂に幕命を受けて蝦夷地に入ることを五回、北邊の事情を探り、士民を訓致して歸人の南下に備へた。その時の蝦夷地の旅行見聞記をも遺してゐる。文化五年(1804)幕府の御用書生として「金銀圖録」のやうな書史學上價値多いものをも作つたが、「正書書考」「右文故事」「金澤文庫考」のやうな書史學上價値多いもの著はし、又種々の異本に接するにつれて、校勘の方面にも目をつけたと見えて、文化十三年十一月には、五編定本取立意見書を上つてゐる。かやうにして守重は、外國の事情及び對外國關係の研究者として書上の研究のみならず、實地調査をも行つたが、一方、古文獻の研究として、殊に書史學に於て立派な業績を残したのである。

【著書】千五百冊を下らないといはれてゐるが、現存するものは大抵、近藤正壽全集に収められてゐる。○清俗紀聞八冊○安南紀略三冊○天川紀略一冊○外國通書略十二巻○夷狄類典凡三百冊○邊要分界圖考十五巻○いざりす紀略一冊○紅毛書五冊○金銀圖録七冊○寶貨考三十冊○右文故事三十巻○外蕃通書(前編)十巻○外蕃通書三十巻○正書書考三冊○同編史部及歴史部五冊○同後集三冊○金澤文庫考一冊○江州本草凡三十巻○蝦夷夷議一冊○富士の朝二冊○近藤正壽全集一冊○續蝦夷紀三冊

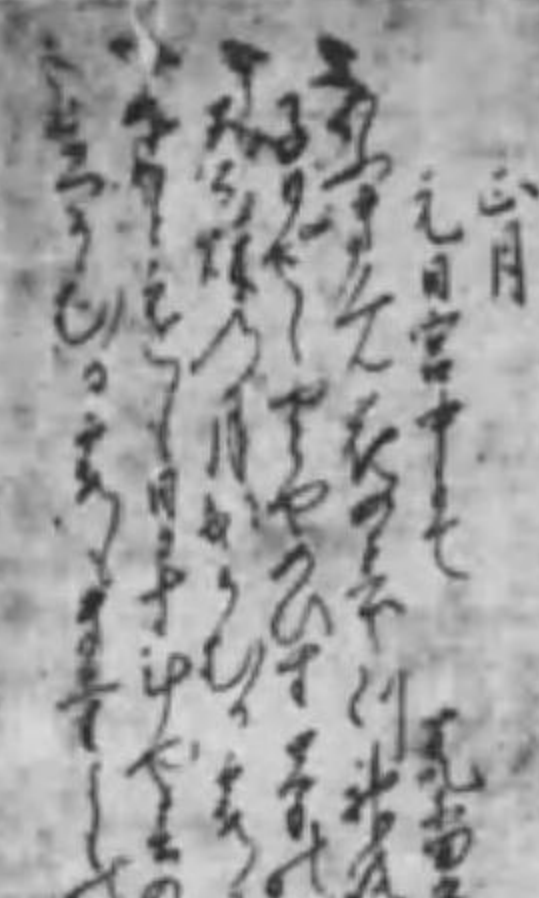
【業績】山本北山の門に入つて漢學を修め、十七歳の時、同學の士と白山義塾を起して自ら教授した。初めて出仕した時から家藏類典の編纂、日本分國及び地誌の編纂に従事したが、當時は外國船が日本近海に出没し、外交上多事多端の時であり、外國の知識を必要とした時であつたから、守重は外國地誌の類を編纂して幕府に上り、又從來の外交關係を調査した「外蕃通書」その他をも作つた。又蝦夷地の取締りについては、遂に幕命を受けて蝦夷地に入ることを五回、北邊の事情を探り、士民を訓致して歸人の南下に備へた。その時の蝦夷地の旅行見聞記をも遺してゐる。文化五年(1804)幕府の御用書生として「金銀圖録」のやうな書史學上價値多いものをも作つたが、「正書書考」「右文故事」「金澤文庫考」のやうな書史學上價値多いもの著はし、又種々の異本に接するにつれて、校勘の方面にも目をつけたと見えて、文化十三年十一月には、五編定本取立意見書を上つてゐる。かやうにして守重は、外國の事情及び對外國關係の研究者として書上の研究のみならず、實地調査をも行つたが、一方、古文獻の研究として、殊に書史學に於て立派な業績を残したのである。

【著書】千五百冊を下らないといはれてゐるが、現存するものは大抵、近藤正壽全集に収められてゐる。○清俗紀聞八冊○安南紀略三冊○天川紀略一冊○外國通書略十二巻○夷狄類典凡三百冊○邊要分界圖考十五巻○いざりす紀略一冊○紅毛書五冊○金銀圖録七冊○寶貨考三十冊○右文故事三十巻○外蕃通書(前編)十巻○外蕃通書三十巻○正書書考三冊○同編史部及歴史部五冊○同後集三冊○金澤文庫考一冊○江州本草凡三十巻○蝦夷夷議一冊○富士の朝二冊○近藤正壽全集一冊○續蝦夷紀三冊

【業績】山本北山の門に入つて漢學を修め、十七歳の時、同學の士と白山義塾を起して自ら教授した。初めて出仕した時から家藏類典の編纂、日本分國及び地誌の編纂に従事したが、當時は外國船が日本近海に出没し、外交上多事多端の時であり、外國の知識を必要とした時であつたから、守重は外國地誌の類を編纂して幕府に上り、又從來の外交關係を調査した「外蕃通書」その他をも作つた。又蝦夷地の取締りについては、遂に幕命を受けて蝦夷地に入ることを五回、北邊の事情を探り、士民を訓致して歸人の南下に備へた。その時の蝦夷地の旅行見聞記をも遺してゐる。文化五年(1804)幕府の御用書生として「金銀圖録」のやうな書史學上價値多いものをも作つたが、「正書書考」「右文故事」「金澤文庫考」のやうな書史學上價値多いもの著はし、又種々の異本に接するにつれて、校勘の方面にも目をつけたと見えて、文化十三年十一月には、五編定本取立意見書を上つてゐる。かやうにして守重は、外國の事情及び對外國關係の研究者として書上の研究のみならず、實地調査をも行つたが、一方、古文獻の研究として、殊に書史學に於て立派な業績を残したのである。

【著書】千五百冊を下らないといはれてゐるが、現存するものは大抵、近藤正壽全集に収められてゐる。○清俗紀聞八冊○安南紀略三冊○天川紀略一冊○外國通書略十二巻○夷狄類典凡三百冊○邊要分界圖考十五巻○いざりす紀略一冊○紅毛書五冊○金銀圖録七冊○寶貨考三十冊○右文故事三十巻○外蕃通書(前編)十巻○外蕃通書三十巻○正書書考三冊○同編史部及歴史部五冊○同後集三冊○金澤文庫考一冊○江州本草凡三十巻○蝦夷夷議一冊○富士の朝二冊○近藤正壽全集一冊○續蝦夷紀三冊

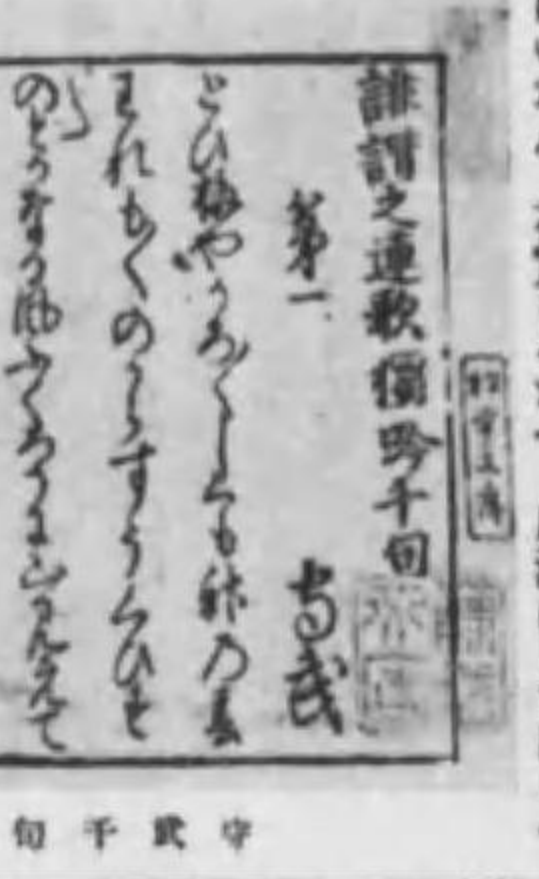
【業績】山本北山の門に入つて漢學を修め、十七歳の時、同學の士と白山義塾を起して自ら教授した。初めて出仕した時から家藏類典の編纂、日本分國及び地誌の編纂に従事したが、當時は外國船が日本近海に出没し、外交上多事多端の時であり、外國の知識を必要とした時であつたから、守重は外國地誌の類を編纂して幕府に上り、又從來の外交關係を調査した「外蕃通書」その他をも作つた。又蝦夷地の取締りについては、遂に幕命を受けて蝦夷地に入ることを五回、北邊の事情を探り、士民を訓致して歸人の南下に備へた。その時の蝦夷地の旅行見聞記をも遺してゐる。文化五年(1804)幕府の御用書生として「金銀圖録」のやうな書史學上價値多いものをも作つたが、「正書書考」「右文故事」「金澤文庫考」のやうな書史學上價値多いもの著はし、又種々の異本に接するにつれて、校勘の方面にも目をつけたと見えて、文化十三年十一月には、五編定本取立意見書を上つてゐる。かやうにして守重は、外國の事情及び對外國關係の研究者として書上の研究のみならず、實地調査をも行つたが、一方、古文獻の研究として、殊に書史學に於て立派な業績を残したのである。



(藏東文字校) 守武千句

守武が「お座敷を見ればいづれもかみな月」と出すと宗紙が「ひとりしづれのみり帽子きて」と附けたといふことであるが、ほぼ同じ事が慶長十八年の「寒川入道筆記」に元理と長慶との事として既に語られてゐるので、寧ろこの方に確からしさがある。(本稿は近藤正壽風氏、近藤正壽氏、近藤正壽氏の研究に資することが多い。)

守武が「お座敷を見ればいづれもかみな月」と出すと宗紙が「ひとりしづれのみり帽子きて」と附けたといふことであるが、ほぼ同じ事が慶長十八年の「寒川入道筆記」に元理と長慶との事として既に語られてゐるので、寧ろこの方に確からしさがある。(本稿は近藤正壽風氏、近藤正壽氏、近藤正壽氏の研究に資することが多い。)



(藏東文字校) 守武千句

守武が「お座敷を見ればいづれもかみな月」と出すと宗紙が「ひとりしづれのみり帽子きて」と附けたといふことであるが、ほぼ同じ事が慶長十八年の「寒川入道筆記」に元理と長慶との事として既に語られてゐるので、寧ろこの方に確からしさがある。(本稿は近藤正壽風氏、近藤正壽氏、近藤正壽氏の研究に資することが多い。)

守武が「お座敷を見ればいづれもかみな月」と出すと宗紙が「ひとりしづれのみり帽子きて」と附けたといふことであるが、ほぼ同じ事が慶長十八年の「寒川入道筆記」に元理と長慶との事として既に語られてゐるので、寧ろこの方に確からしさがある。(本稿は近藤正壽風氏、近藤正壽氏、近藤正壽氏の研究に資することが多い。)

に移った。十一月十八日海に降り、既田野軒の館長をしてゐた...



もり光七の肖像

員として清國に赴き、次いで同年秋歐洲に渡遊し、東京に留まること始り...

學會を創て同志と共に後進を誘致し、更に演劇風會の事に斡旋するなど華々しい活動...

【著者】「平家物語の流曲」を見よ。盛久 側柏葉...

【著者】「平家物語の流曲」を見よ。盛久 側柏葉...

【著者】「平家物語の流曲」を見よ。盛久 側柏葉...

【著者】「平家物語の流曲」を見よ。盛久 側柏葉...

【著者】「平家物語の流曲」を見よ。盛久 側柏葉...

【著者】「平家物語の流曲」を見よ。盛久 側柏葉...

【著者】「平家物語の流曲」を見よ。盛久 側柏葉...

【著者】「平家物語の流曲」を見よ。盛久 側柏葉...

【著者】「平家物語の流曲」を見よ。盛久 側柏葉...

【著者】「平家物語の流曲」を見よ。盛久 側柏葉...

【著者】「平家物語の流曲」を見よ。盛久 側柏葉...

のことが記してある。又この後編本では、葛原句富の跋「葛原句富云、千本之正統とあるのを削り、「中島梅枝、平岡松葉」と云ふ文字を埋木してある。その他内容にも若干の相違がある。【内容】(上巻)初めに八雲琴名所・愛宕・衣袴・琴名等の詞があり、次に琴奏の法意十二箇條、彈音六箇條、七六箇條、指色六箇條、左打色六箇條、彈吟中の大事八箇條等を記す。琴歌は、歌牙組(三巻)、出雲組(六巻)、内日組(八巻)、高麗組(八巻)、八代組(八巻)、藤原組(三巻)、合計三十六巻。【二巻】これは「古事記」の文章、歌謡「由來集」以下の歌集の和歌等を取ったもの。由來組(六巻)、功徳組(六巻)、上代組(六巻)、歌石組(六巻)、常舞組(六巻)、合計三十六巻。【三巻】これは八雲琴名以下門弟連の作詞に成るものである。附録今様及組十六巻(百有餘巻ある)。「三巻」外曲種々として、神樂掛三巻(備馬樂振(六巻)、出雲舟歌振(八巻)、古今今様(十二巻)、筑紫振(八巻)、若菜組(八巻)、この最後の若菜組は、三味線の組歌より取り入れたものがある。他に八雲琴二百吟と云ふ和歌集がついてゐる。【歌謡】古歌を取り入れたものがあり、新作も古歌を旨としてゐて時代色に乏しい。「きそ」の山路をはるんと、馬道の國に歸りつゝ、無田の宮ゆゑの宮つしまにまうで夜もすがら、此大宮の廣野、八雲小唄を聞き明す(津島調子)【琴調】八雲琴調子の友三巻(土曜調子)これは、表裏裏、中、裏と分けた歌がある。○新編八雲琴調(二巻)【音階】この音階は、音階を記したものである。【編者】



八雲抄 第六冊 意行 秋をいし事... 竹相聞歌の乾元本八雲抄、傳馬歌振本八雲抄、傳馬本八雲抄(大書)に、傳馬、傳馬、傳馬八雲抄(小書)等がある。【組織】内巻

第一巻正義部、第二巻作法部、第三巻上下、枝葉部、第四巻言語部、第五巻名所部、第六巻常用部に分れてゐる。正義部は六義、序代、短歌、反歌、旋頭、混本、總文、無心所著、詩語、折句、香燈折句、香燈物名、贈答、異體、連歌、八病、四病、七病、學書等に就いて和歌四式別項以來、次第に生じて来た和歌の修辭的規則を集成して集めて、且つそれまでの學書分類して集めてある。第二巻の作法部は、歌合、歌會、書律、題判者、序者、調師、調音、香燈者、清書、調集等の項目に就いて、歌合中、調集の知識を集成してゐる。第三巻の上下は、天象、時節、地、人倫、人事、衣食、雜物、異名、雜物等に於いて、それに関する語彙の解釋を世に傳へてゐる。第四巻の言語部は、世に傳へる、第四巻の言語部は、世に傳へる、第五巻の名所部は山、嵐、嵐、嵐その他に分けて地名の出所を舉げて居り、第六巻の用意部は著者の歌集を擧げてゐる。本書のうちで最も價値の多いのは、巻一と巻六とであるが、殊に巻六は、八雲抄(別題)の歌集を見る上に注意すべき資料である。「八雲抄」は全體として古代歌集の集成的著述であるだけに、歌謡に於ても、それ以前の見解をひろく統一して、確たる見解を唱へてゐる。歌をよむ根本は心の起るといふことであるが、歌をよむ上の制すべき點として、第一、ちかき人の歌の詞をぬすむ事、第二、あらぬやうなる秀句をこのむ事、第三、詞のいりばが、第四、風情のいりばが、第五、心えさせぬ事、第六、にくいやいけを好む事の六ヶ條を擧げ、又歌の上に重んずべき點として、第一、風情をさきとすべき事、第二、心をさきとすべき事、第三、詞をさきとすべき事、第四、古歌をとる事、第五、てにをはといふ事、第六、よく思惟すべき事の六ヶ條を擧げてゐる。これによつて全體としては定家のやうな巧緻の表現を風情や詞のいりばがとて非難し、俚俗等の立場を重んぜられたと見ることが出来る。さうしててにをはを尊重し、思惟を重んぜられたのを見て、表現のこまかさと共に沈滞的傾向を重んじた點が見られるのである。【價値】八雲抄は、古代歌集の一大集成といふ點に於て中世初期の最もすぐれた歌集であり、歌論書である。歌集知識の集成としては清輔の「奥の細道」も注意すべきであるが、「八雲抄」の第一、二巻はその奥の細道の集成に更に一步を進めたものと見られよう。また第六巻の用意部は、従来の歌集を集成して組織的に説かれた意味で、他の如何なる歌論書にも見ない特徴をもつてゐる。創見の多い點では、定家の「毎月抄」(別題)の如きは、「八雲抄」より優れたものであらうが、集成統一の功は、「八雲抄」に及ばない。強ひて全體として「和歌色集」(別題)であるが、その集成統一の點に於て、色集よりも遙かにすぐれてゐる。【編者】

八雲抄 六巻 三巻 【著者】

【著者】 荻生徂徠【解説】 同調異義の文字を列挙して、一々その差別、用法等を説明したものである。伊藤東涯の「漢字考」(別題)と共に同種の書中傑出したものである。巻首に題旨十則があり、徂徠の文章についての見識を顯やかに示す。【批評】 山本北山の「作文學」に「觀文堂詩は徂徠二十五歳の時の著述の由云はるれども、巻首に載する題旨十則は晩年の作に出づ。如何となればその題旨の中に文辭を作ることを載せ、四家高を編む主意を著す。これ近き證據なり。題旨に云ふ所の説は余文事正誤を著して論ぜることなれば姑く置く云々」とある。(代々)

野傾旅葛籠 浮世草子 五巻 【著者】 序の末尾に作者江戸市笑とあるが、假の名であつて、其類と考へられる。【刊行】 正徳二年初春、京都八幡町室町西入る江戸屋市郎左衛門(別題)宣保四年に、京都河原より河原橋の手枕と題して出版せられたものは、本書の再版本である。本書の巻之三、四を再版本では巻之二、三に、本書の巻之一、二を再版本では巻之三、四、五に改め、本書の巻之五(田舎女郎の種)を全然除いたものである。人名の如きも悉く入木して更へてあり、その他文中多少の相違もある。かく原本の順序を更へ、或る巻を除き、文等を取捨したなどは、新版と見せんとする書肆の手段である。江戸時代文藝資料第五所載。【由来】 この作は江戸屋出版書の最初のもつと見られる。其蹟が八文字屋より獨立して、その子に書肆を營ませ、自作を出版せしめたのは、正徳元年又は二年の文である。本書はその際出版のついでである。

女野郎の大元締があつて、此處へ年季を定めて抱へに来る者、毎日常人と云ふ數を知らなかつた。或る時西島のかつわの親仁が來り、大夫になるべき業を求め、奉主八色右衛門はすべて業は外見よりも内徳のよきを主として求めなければならぬと忠告する。また京川町近郊の役者の親方が舞臺子に求め来たのに對しても同様のことを説く。これは第一話であるが、以下第二、三、四話共に京大坂の舞臺子の内幕生活を描き、舞臺子と國木津に宿つた夜、その奉主は日代の吟味を恐れて急の立退を求め、喜美三郎は李平と云ふ供の者とせん方なく立ち退くが、途中、とある河原で親切な庇護をうけた非人権七の眞情にほだされて、緊き契を結ぶと云ふ第一話以下第二、三、四話、すべて近江美濃、大和邊の舞臺子の内幕を描くもの(巻之三)第一話は遊里の業種に就いて語り、第二、三、四話は、島原吉原、新町の遊女の手管を語る。(巻之四)に京大坂の白人のすたれ者が近國の關根市立に旅籠をする状を述ぶ第一話を始め、第二、三、四話には、北國筋、安樂宮、長崎丸山の遊女の生活振りが記されてゐる。(巻之五)奈良木津の遊里に京の菊川大藏と云ふ者が太鼓末社を連れて遊んでゐる。そこへ奈良の刀屋徳内の手代半九と云ふ風俗者が大藏に恥をかかせる。それを面白く思つた小僧古兵衛と云ふ末社が、半九を欺いて夜更けに元興寺の門前まで誘ひ出し、主人徳内をして散々に懲らさしめる第一話を始め、第二、三、四話には、大津榮屋町、伏見橋木町、京町町等の遊女と遊者の生活振りが描かれてゐる。【構想】 五巻をもつて一部を成し、一巻は各々

四回話を包含してゐる。而して巻之一は、三節津舞臺子の巻、巻之二は「旅行の舞臺子の巻」、巻之三は「松島島の巻」、巻之四は「遊里の業種の巻」、巻之五は「田舎女郎の巻」であつて、その標題に語らざるべき知識が、全部で二十篇含まれてゐる。即ち巻之二は、京大坂、江戸三都の舞臺子及び近畿旅籠の舞臺子の生活に現はれた眞と偽と、心意氣と内情とが描かれてゐる。又巻之三、四、五には、三都の太夫、また諸國の遊女連の手管と客の遊び振りが描かれてゐる。これに要するに「野傾旅葛籠」一篇は、西島以來の好色本の傳承を辿つて、男色、女色の様々を語つたものである。「史的地位」この作品は、其の頃の傑作であることには先づ疑ひがない。これより以前の其頃の傑作としては、八文字屋板の「傾城色三味線」「野白内證」「傾城短氣(各別題)」を擧げなければならぬ。「傾城王子酒」と云ふが、寛永六年に出版されたことになつてゐる。純粹の傾城小説らしく思はれるが、或は廣告のみに終つたものかと思はれる。而して「野傾旅葛籠」は、其蹟が八文字屋より獨立して最初に出版した作品と思はれる點から見て、其頃の傑作中相當注意すべき地位にある。(吉田)

野傾友三味線 浮世草子 五巻 【著者】 西澤與次(二)【名】 野は野郎、傾は傾城、野郎と傾城の両色に關する意。【刊行】 寛永五年閏正月吉日【解説】 巻一は一風流の序話に當つてゐる。新八といふ女色の家に到り、男女両色に關して論をなす所に、廣口天休といふ者が來て兩人を仲直りさせ、兩色は結局車の兩輪の如しと決まる。乃ち兩

る。だが、以上の缺點に拘らず、美観年少の女傑、義のための仇討、水雲に輝く貞烈、獅子度穴を穿る猛氣などといふ點が、よく當時の大家の理想と要求に一致したので、あれ程の好評を得たものであらう。

八橋流 八橋は舞臺國平の人、江戸で山住句富といひ、三味線を學んだが、江戸に出で、法水に通つて筑紫帯を學び、後自ら九州に行き、玄魁に就いて悉くその秘曲を受く。京都に歸つて八橋檢校と呼び、慶安年間八橋檢校より始まる。八橋は舞臺國平の人、江戸で山住句富といひ、三味線を學んだが、江戸に出で、法水に通つて筑紫帯を學び、後自ら九州に行き、玄魁に就いて悉くその秘曲を受く。京都に歸つて八橋檢校と呼び、慶安年間八橋檢校より始まる。

八橋流 八橋は舞臺國平の人、江戸で山住句富といひ、三味線を學んだが、江戸に出で、法水に通つて筑紫帯を學び、後自ら九州に行き、玄魁に就いて悉くその秘曲を受く。京都に歸つて八橋檢校と呼び、慶安年間八橋檢校より始まる。

八橋流 八橋は舞臺國平の人、江戸で山住句富といひ、三味線を學んだが、江戸に出で、法水に通つて筑紫帯を學び、後自ら九州に行き、玄魁に就いて悉くその秘曲を受く。京都に歸つて八橋檢校と呼び、慶安年間八橋檢校より始まる。

八橋流 八橋は舞臺國平の人、江戸で山住句富といひ、三味線を學んだが、江戸に出で、法水に通つて筑紫帯を學び、後自ら九州に行き、玄魁に就いて悉くその秘曲を受く。京都に歸つて八橋檢校と呼び、慶安年間八橋檢校より始まる。

八橋流 八橋は舞臺國平の人、江戸で山住句富といひ、三味線を學んだが、江戸に出で、法水に通つて筑紫帯を學び、後自ら九州に行き、玄魁に就いて悉くその秘曲を受く。京都に歸つて八橋檢校と呼び、慶安年間八橋檢校より始まる。

八橋流 八橋は舞臺國平の人、江戸で山住句富といひ、三味線を學んだが、江戸に出で、法水に通つて筑紫帯を學び、後自ら九州に行き、玄魁に就いて悉くその秘曲を受く。京都に歸つて八橋檢校と呼び、慶安年間八橋檢校より始まる。

八橋流 八橋は舞臺國平の人、江戸で山住句富といひ、三味線を學んだが、江戸に出で、法水に通つて筑紫帯を學び、後自ら九州に行き、玄魁に就いて悉くその秘曲を受く。京都に歸つて八橋檢校と呼び、慶安年間八橋檢校より始まる。

八橋流 八橋は舞臺國平の人、江戸で山住句富といひ、三味線を學んだが、江戸に出で、法水に通つて筑紫帯を學び、後自ら九州に行き、玄魁に就いて悉くその秘曲を受く。京都に歸つて八橋檢校と呼び、慶安年間八橋檢校より始まる。

八橋流 八橋は舞臺國平の人、江戸で山住句富といひ、三味線を學んだが、江戸に出で、法水に通つて筑紫帯を學び、後自ら九州に行き、玄魁に就いて悉くその秘曲を受く。京都に歸つて八橋檢校と呼び、慶安年間八橋檢校より始まる。

八橋流 八橋は舞臺國平の人、江戸で山住句富といひ、三味線を學んだが、江戸に出で、法水に通つて筑紫帯を學び、後自ら九州に行き、玄魁に就いて悉くその秘曲を受く。京都に歸つて八橋檢校と呼び、慶安年間八橋檢校より始まる。

八橋流 八橋は舞臺國平の人、江戸で山住句富といひ、三味線を學んだが、江戸に出で、法水に通つて筑紫帯を學び、後自ら九州に行き、玄魁に就いて悉くその秘曲を受く。京都に歸つて八橋檢校と呼び、慶安年間八橋檢校より始まる。

八橋流 八橋は舞臺國平の人、江戸で山住句富といひ、三味線を學んだが、江戸に出で、法水に通つて筑紫帯を學び、後自ら九州に行き、玄魁に就いて悉くその秘曲を受く。京都に歸つて八橋檢校と呼び、慶安年間八橋檢校より始まる。



(中五和明) 附書本 繪本時七團圓

山流を開き、生田は京都にて、繼山は大坂にて大に行はれ、三橋安村の派も亦、生田流の中に同化されるに至つた。八橋流はこれに壓倒され、被追一、住川、龜島、菊島、野村、玉橋、玉岡と傳統されて、玉岡檢校が明治の末年に没してから遂に亡んでしまつた。今日では流傳に於て八橋流が主として行はれてゐるに過ぎない。安村檢校の門からは、圓に示すやうな人々が出た。八橋檢校から安村、久村檢校

明治の初年に神戸に名人中島檢校があり、その門弟から現今に於ける新舞臺の驍將宮城道雄氏が出た。今や宮城氏の新舞臺はその作曲の優秀と技巧の精巧とによつて全國を風靡しつゝあり、舊來の生田流、繼山流、山田流の外に、宮城流とも稱すべき一新流派が勃興しつゝある状態である。

極向に依つて脚色した。舞臺作中の中、舞臺二幕中の舞臺。【提稿】(原本に依る)【日明】(併の魚市)茂兵衛が魚の賣立をしてゐると、かねて戀仲の藤子とみか、待高橋右衛門に連れられて來る。敷右衛門はとくに横暴を以てゐるのであるが勿論應じない。戀の意趣から茂兵衛と敷右衛門は喧嘩を始める。茂兵衛の世話をし

物、夏狂言であつたと思はれる興行が、通説の初演前、即ち明和四年閏九月朔日、京四條北側芝居で、大坂から上つた竹田芝居の一座に依つて行はれた(後者無稽説)及び日本舞臺全盛本正三舞臺(併しこれを初演とする)との狂言が一夜演じ取入れたと傳へる岩井風呂事件の時日に先んずる。なほこの時の興行の様

正三ではなく清芝居の作者であるといひ、又作中に出る狂言作者もこの時は並木正三の名ではなく、さうなつたのは寛政二年五月の興行以来であると云つてゐる。成る程明和五年七月の時の繪本附書と並木正三ではなく平右衛門となつてゐる。併しこれを以て直ちに「傳奇作書」の説を信じ、正三の作にあらずとするのは早計であらう。兎に角現存の内書が、そのまゝ正三の作でないといふ事は斷言出来ると思ふ。正三にしてかゝる世話をした時代は作者の筆が次第に加へられて行つたものであらう。この狂言は女郎殺しの一夜讀であるばかりでなく、作中に役者や作者を出した所に大に新味があつた。而してその優れた構想は正三あたりの案であり、その心理的方面に於ては、五瓶などの力が加はつてゐるのではあるまいか。本作は淨瑠璃にも取り入れられ、文化二年八月、道頓堀大西芝居で演ぜられて以來、度々上演されてゐる(原本未見)。宿無七を脚色したものとしては、歌舞伎に早く元禄十一年片岡仁左衛門に依つて演ぜられた。本狂言は、團七物として「夏祭道花(別題)」と列んで重要な二系列をなす。且「説法花(原本)」「天保三年六月、河原屋、影演劇川家根結」(同前)「明治七年七月、舞臺等も殆ど外題を變へただけで、現在に及んでゐる。

【提稿】藤原良平は陸中宮古在、山口村に生れた。小學校の成績もよく、中村敦子や藤澤吉の著書を読んで文學博士を理想とし、教育家たらんと志した。千鳥探偵の藤岡大尉の一行を歓迎した日か念に軍人を希望し、明治二十九年の秋、仙臺へ出奔して大木將軍邸を敲き、遂に同邸の書生となる事が出来た。時に満十四年三月であつた。當時良平の父良助は、村政の紛争より公金費府の罪名を受け、控訴して仙臺の未決監にあつた。將軍は良平の家庭、良助の犯行などを聞き、藤原兵隊長の報告に基いて世話を事となつたのである。間もなく將軍府書生となつた良平も隨行した。總督府官邸で、良平は父良助が六ヶ年間に亘る未決監生活を脱し、無罪の言渡しを受けた通知を得た。小學校時代から良平の伴として、あらゆる侮辱を受けてゐた良平は、初めて尊嚴を回復した。のみならず上京して中央幼年學校に第三席の優良な成績で入學した。學費は大木將軍より藤原中佐を通じて支給された。當時中佐は東京幕府に轉任してゐた爲め、良平は同中佐の一女夏子と知り、遂に許婚の間柄となつた。幸運と光明に開眼された良平は、何故か幼年學校に於ける學業の成績は段々低下して來た。遂に最末席で幼年學校を卒業し、旭川軍隊に勤務したが、後再び士官學校に入學し、三十六年十一月中等の成績を以て卒業し、旭川軍隊に復歸した。良平と夏子とは絶えず文通はしてゐたが、最早結婚の望は絶えてゐた。折しも日露開戦の報は聞かれ、良平の恩人大木將軍は藤原不落の旗幟攻撃の大任を帯びて日夜苦闘してゐた。明治三十七年十一月二十九日、良平は大木將軍の部下として旅順へ出陣する



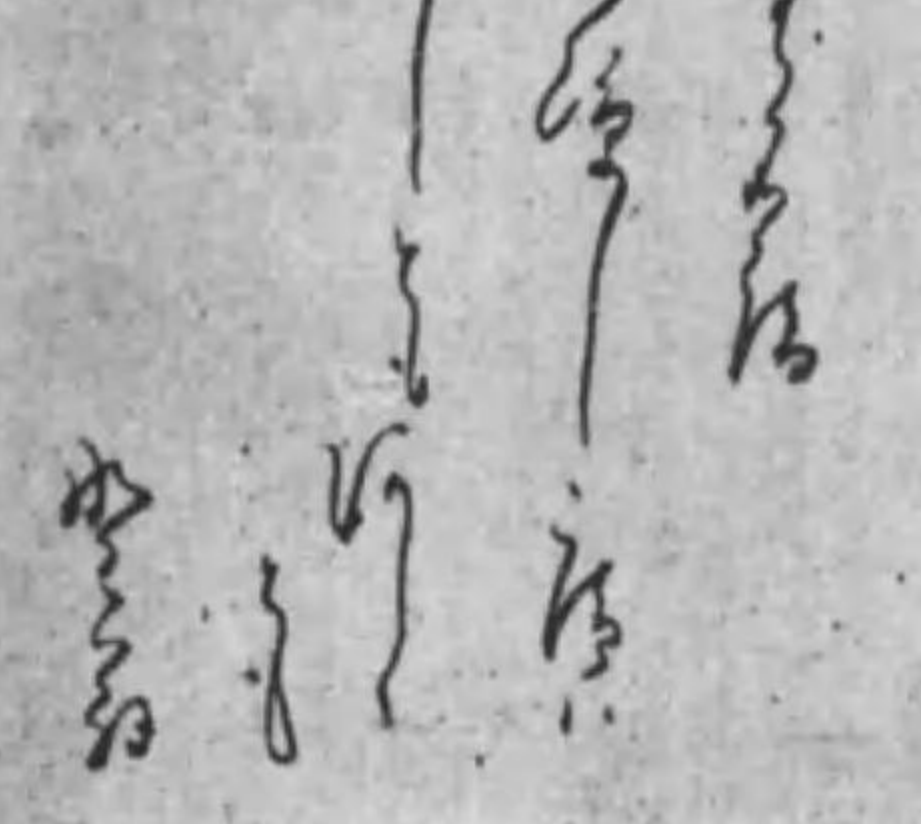
進に及び、卒業後助教に採用された。次いで大阪府立第一高等学校の教員となり、更に福島英語学校教授に轉じ、明治十年上京して報知新聞に關係した。次いで福澤諭吉の推薦で、大隈重信の下に大藏省書記官に任用され、進んで大藏省書記官・大書記官兼二等検査官から明治十四年統計院事務となつたが、大隈が野に下ると共に職を辭し、専ら改進黨の組織に就いて參畫した。この間報知新聞社に入り、新聞小説に一新生面を拓くべく、「経國美談」(別題)を掲載して盛んに迎へられ、熊沢の文名大に揚がった。十八年渡歐して新聞事業を觀察し、十九年歸朝再び輸入小説『浮城物語』(別題)を執筆して好評を得た。二十三年豫て待ち望んでゐた學問の間に、

然るに、野は、野の才氣は水く閑地に居ることを許されず、伊藤博文の推薦により、武部官となつて宮内省に入つた。後二十九年、松方内閣が組織され、大隈重信の外相となるが、彼は抜擢されて駐支公使となつて北京に赴いたが、三十二年に辭してから全く政界を退いてしまつた。その頃から思ひを社會問題に滑りて種々研究するところあり、三十五年七月『新社會』(別題)を公けにし、時の評論家をして「今や彼は社會問題に於て復活したり」と言はしめた。翌三十六年九月『社會主義全集』を公けにした。次いで近事報社を起し、岡本野矢を編輯主幹ならしめ、日曜新聞を起す。

改題「時事電報」を發行し、後には雑誌「新古文林」の外、諸種の出版をしたが、遂に成功を見事に至らなかつた。後、大阪毎日新聞社に入つて副社長となり、傍らその紙上に隨筆を書いたこともあつたが、昭和二年十二月副社長の地位を去り、相談役となつた。(著作)前記の外に、「日本文學文字新論」(別題)「英米雜記」(西洋雜記)その他隨筆集がある。博識と麗妙な文才とから成る彼の隨筆は、明治文學隨筆中の一流に置かれるのみでなく、新聞事業の先導者として、我が國の新開界に多くの新知識を與へた。



野矢(姓名) 志太氏。本姓竹田氏。通稱野矢。初號野馬。櫻木社・精進社・漢學生庵、略して漢生庵、無名庵、高津野々翁、略して無名庵野翁、妙方齋、妙明子、秋草令、牛齋堂、三日庵、百花堂、蘇鐵庵、かゞし庵、常用庵、照田居士、居士(生)、「生」寛文三年生れ、元文五年(一八〇〇)一月三日没す。享年七十八。[法名]壽元居士[墓所]大阪小橋寺町



つてゐた。寛永二年頃越後屋を退いて大阪農人橋本に移り、櫻木社を結び、加賀金澤の川邊若水氏の女を娶り、一女政を擧げた。享保七年に頼朝に逢ひ、翌八年高津津に漢生庵(漢生庵)が成つた。然るに此が新聞地の根にかゝつたので、五十歩ばかり東へ移して元文四年に成り、木曾家の無名庵の名を遺し、自ら無名庵高津野々翁と稱した。かくて翌年没したのである。佛歴に於ては、貞享四年の「續虛果」や「句讀別」に、野馬の號で見えるのが初めである。然るにこの後、業務上の關係から、元禄六年まで作が見えぬのであるが、元禄七年に、同じ香頭同士の孤庵・利牛と共に撰で「炭依」(別題)を撰し、これが佛歴上の地歩を築かしてゐる。この後連年彼の作が見え、又後度々發行もしてゐるので、關西九州に門人も多く出

は彼の體格が芭蕉の體に誘導されたのと芭蕉の指導とに依つて一時的の海を見せたものと見らるべく、芭蕉以後は器用さはないではないが體調となつてゐる。芭蕉が連句に於て「及び難し」(別題)と云つたといふのは、野矢のいふことであり、「此度ノ上ニ立モノ一人ナシ」(別題)など云ふのも、野矢側の説に譲られたものであると共に、芭蕉に無理になつた時代の見である。野矢が人氣を得たのは、芭蕉没後、芭蕉の時期に向つたのと、その體格が大衆向、通俗向であつた故と考へられる。

と題して錢占の功徳及び方法を説いてゐる。「此」占は野白兩道の來る來ぬを考へ見るばかりにあらざり、一切色道の善悪女の心にかかりに思ひあるな心の底底をかんがへし、占事、ふらふらの酒の心を合せ其内へ入。信を取て愛染明王の眞言を三返唱へ。暫ふりて左の手におさめ、右の手に一錢づつ上より下へならべ、錢の表裏の並を此卦と見し、其所に書簡す文段を見、心に並ふ事を含せ見るべし。大體に於てかくの如く云つてゐる。次いで「陳私・陳情・似男・金白・竟夜・吟街・夢夢・輪轉・再動・陳計・意違・情持・聖圖・巧坊・廻來・幼謀・講笑・男情・變色・化女・三想・前縁・互略・久經・後榮の三十二卦を撰び、且つ算本道東五枚を圖示して錢占の説明をなし、野郎・白人の遊興の種々相を記してゐる。而して一之巻七話、二之巻七話、三之巻六話、四之巻六話、五之巻六話、これ等の錢占を出発點として發展せしめてゐる。即ち例として一之巻第一話を採ると、陳私卦に當る京の野郎大區が密かに伏見榎木町に遊び、一人の太夫を中心にして中京の四二といふ大區とあらがごとし。怒りのまゝにその大區の室に押入つてみたところ、それは自分の客であつたといふやうな皮肉な筋である。また最後の五之巻第六話の後榮卦に當る中京の二吉といふ大區が遊興の餘り勘當され、愛人の遊女ともどもに落魄してゐたが、後その遊女の眞實に親を感じて、そのため勘當を許され、家産を譲られて榮えたといふ筋があり、この一篇は構想に於て甚だ凡ならぬものがあり、表現も亦簡にして、よく好色生活の委曲を盡し、八文字屋出版の好色物と

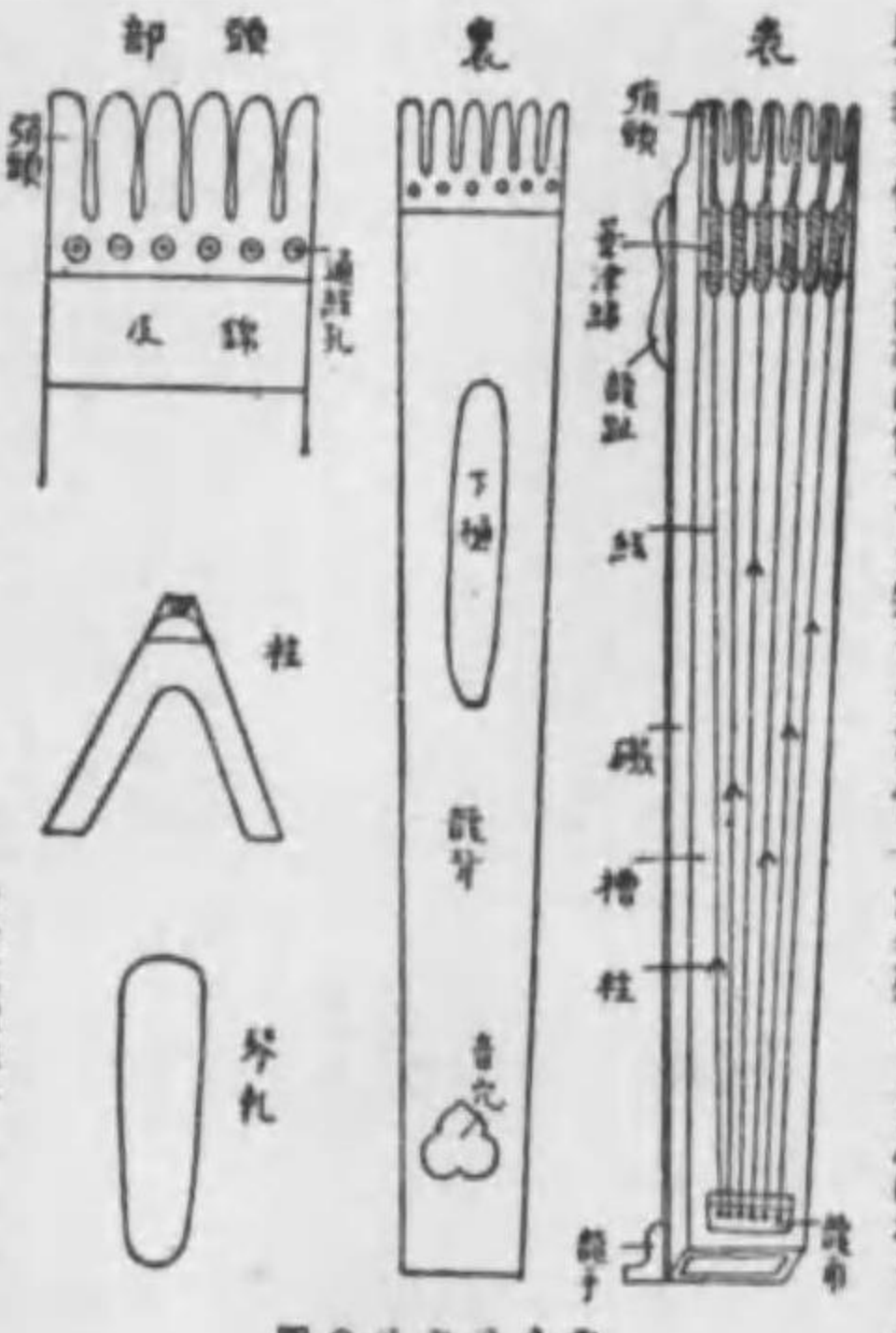
して最も注意すべきものである。【参考】近代小説史 藤野野矢太即〇八文字屋物語 研究 水谷不則 日本文學叢書 〇列傳體小説史 四上

追善の集を企てる者もなかつた。それは高足たる野矢・野村の二人が、師の没後間もなく江戸を去つて、地方に流寓してゐたからであらう。然るに寛政四年六月、師の十三回忌に至り、始めて野矢の主催で同門の阿彌・大洲と力を協せ、本書が撰ばれたのである。その自序によれば、新たに追善句集を撰ぶのは困難なので、師の遺稿を出版した由を記してゐる。當時野村は京都にあつてゐたので、野矢に書文を寄せた。これより先、野村も亦實は師の遺稿を探つて「二羽鳥」を編む志があつたのだが、野行十年、事成らずにゐる間に野矢によつてその志は果されたのである。【内容】巴人の發句を四季に類別して收め、その句數は約三百に近い。なほ卷末に、野矢・大洲・阿彌・野村の百五の五人で撰行した隨筆の百韻一巻と、巴人の門友等の懷舊追善發句とが十五丁に互つて載せてある。巴人の句はこの外に洩れたものも頗る多く、若しその拾遺を編んだら、なほ百句近くを採收する事が出来よう。併し彼の句風は本書によつて十分知り得べく、讀見は江戸座の俳人中特に俗を題してゐたさまで寛はれる句風は遂に時流を脱したかたさまで寛はれる。従つて野村への影響は全くその讀見にあつたので、かの香艷的發句、古典的趣味の如きは、未だ巴人の作中には見られない。併し

らうが、それも本曲の生命を維持する力はない。採に於ける上演回数に於ては、...

【附記】本曲は、行状記(元文三年正月二十日)に、...

【参考】近世邦楽年表(大正天皇御紀)...



長さ七尺、廣三尺、厚一尺五寸とあるが、この尺度は古代の周尺を用いたらしく、...

は楡材である。柱は楡の枝を皮つきの楡材を用ひてゐる。今日用ひられるところの和琴の形は、...

【沿革】和琴は神代から大和民族の間に行はれてゐた。...

【沿革】和琴は神代から大和民族の間に行はれてゐた。...

いことは明かである。何となれば弓には共鳴装置がないから、これを並べて弾いただけでは、...

【沿革】和琴は神代から大和民族の間に行はれてゐた。...

【沿革】和琴は神代から大和民族の間に行はれてゐた。...

の初めに於て、神佛混合の甚しかつた時代には、...

ある。傳唱時代の文學は、最初は全く文字のなかつた太古に、...

【沿革】和琴は神代から大和民族の間に行はれてゐた。...

【沿革】和琴は神代から大和民族の間に行はれてゐた。...

が大喜びで迎へてくれた。殊に姉の喜びやうは格別である。...

中へ誘ひ込ますには置かない。この作の構想は作者の空想のうちになつたといふが、筆致は素朴でリアルである。...

居の生活の模倣の便なる、作が多く、又梅を詠んだ作が多いのは、庵の附近に梅林があつた爲めであらう。...

集めたものが、本書及び「蘭の巻」である。従つて本書は、断片的な研究ではあるが、同時に守部の註釋の精確であつて、著者のこの方面の研究の深さと廣さを示すものとして、守部の著書中、最も注意すべきものとして、ある。(中略)

して、専ら人道主義詩風への完成に力めた。及び童話、創作、翻譯等がある。...

し、これ等によつて一流を構成したかとも思はれる。「口實集」によると、延寶五年十二月十二日、...

が、多く五段の形式を襲へてゐる。正本に大體三種の別がある。(一)延寶天和時代、十七行前後で、...

水邊拾遺(二)佐渡島日記等に三井飛騨清行の名が傳へられてゐるが、山本飛騨と同一人か否か判らない。要するに彼は機巧の細工人であり、...

有職故實

【解説】有職故實の全般に亘つて、その概要を知らうとするには、『古事類苑』文學部卷二、二十五有職事類...



雄長老

抄、物具裝束抄、桃花菫華、胡曹抄、海人滿芥...

邊なき母を如是院に引取つて孝養を盡した。この宮川尼も亦、和歌狂歌を弄くした。或る...

した。後建長寺玉雲庵に入つてゐたが、信濃諏訪の慈雲寺の請に應じて同寺に赴き、後に...

有職故實

つて、女や無邪氣の美がその例である。フイヤー(Che. Vain)によれば、醜に關係せず...

やうに、「美しい魂が幾分躊躇して形式に従つて現れると醜態の優美となり、レニの胸の如く、形式への附依が十分でない...

よると講義、學校、演劇、書籍等の章を設けて述べ、なほ附録として御法令、日光御尊起等について記したと思はれる。『編纂』...

【有明詩集】大正十一年六月、アルス。【内容】作詩、詩評、散文詩、並に回想的自註が附してある。『自費集』の章に明治四十一年から大正四年まで八年間の未だ單行本に收められぬ新作を集めた。『有明集』以後の作品は用語に口語を選び、晦澁の體を避けて平易を事とし、新詩體を志したが、それ等は略と奉り失敗に終つた。なほ『有明集』その他散載の詩語が、その改作は創作當年の詩情を作者自ら斥けて、新しき感情で平明に推成處理しようとしたもので、奉り失敗してゐる。『自費集』『有明集』『有明詩集』全四十八篇外にロゼテ、ルバイヤット及びブレイトン詩五章、明治皇後詩風の最高所に立つと同時に、その詩風の長所と短所とを併せ有し、明治新體詩の格律調の諸點を位置の「白宮」(白宮)と共に分掌して最もよく現はしてゐる。智慧の相者は我を見て「茉莉花」の體に「我詩」の序のしらべ、「三人魚の海」等を代表詩篇とする。「三人魚の海」は西鶴の「武遣傳來記」(詞)に據り、ヨオリチ「老の水手」を倣はせる當年多く賣出した歌中での佳作である。有明のロゼテ、詩評は原詩の解釋に關しては異論を述べ、論議が多いが、最もよく純詩の獨立性を發揮してゐる好

今は既に悔悟せる三郎・四郎・大炊之介は五郎等五人の兄弟各々その得意とする笛・小鼓・大鼓・太鼓・柳を備わしての常態、中川の幽霊雪女の助け、新渡・細川の忠告により遠征滅んで、皆々目出度き春を祝ふ。

【解説】本作は「聖曲類纂」に、近松時代物三傑作の一としてある。一人の主人公を中心とせず、幕内五人の兄弟を立役としてそれれ、皆能演に活躍せしめ、又各巻頭に「幕内樂事」の所作を列記したのを初めとし、松柳・尺八・笛・雪女・大黒舞・追羽子・もんく・系圖・笛・小鼓・大鼓・太鼓・柳等の趣向を取入れる等、場面の変化に富んだ専ら舞臺效果本位の賑やかな作であるが、両も全體が整然と纏まつてゐて、確かに近松時代物中異色あるものである。三段形式を時代物に試みた點よりしても、近松はあつた拍子をもつて本作の筆を揮つたのではないかと想像される。

【参考】近松之研究 内田綱山 ○近松傑作全集 卷之四 近松本宅 ○近松名作集 上解題 本全集 第十二卷 解題 木谷清時 (近松) 正三 全集 第十二卷 解題 三卷 寛 (著者) 観劇(著者) 人 編(著者) 【名稱】雪初に雪の魚と稱する奇魚の記事があるので、「雪の魚の如くはじめをばりの鰻竹なきをうらやみて」本書の題名としたものと見える。【解説】編者が多年諸國に巡遊して、目撃した奇事・異蹟を綴じたもので、概ね記實ではあるけれども、今の世には信じ難い事もある。多く圖畫を描む。上巻に雪の魚・野馬・山上の雷・雷歌・折脚門・白雨の鐘・瑞々の毛等五十三項。中巻に曲玉・河津渡・江口の君堂・大物橋・八幡橋・獅子頭・道通等六十三項。下巻に高砂の松人窟

【参考】近松之研究 内田綱山 ○近松傑作全集 卷之四 近松本宅 ○近松名作集 上解題 本全集 第十二卷 解題 木谷清時 (近松) 正三 全集 第十二卷 解題 三卷 寛 (著者) 観劇(著者) 人 編(著者) 【名稱】雪初に雪の魚と稱する奇魚の記事があるので、「雪の魚の如くはじめをばりの鰻竹なきをうらやみて」本書の題名としたものと見える。【解説】編者が多年諸國に巡遊して、目撃した奇事・異蹟を綴じたもので、概ね記實ではあるけれども、今の世には信じ難い事もある。多く圖畫を描む。上巻に雪の魚・野馬・山上の雷・雷歌・折脚門・白雨の鐘・瑞々の毛等五十三項。中巻に曲玉・河津渡・江口の君堂・大物橋・八幡橋・獅子頭・道通等六十三項。下巻に高砂の松人窟

詞・石寶殿・鳥打頭・宇都宮織姫・古藤・小春のあはれ等五十二項を収めてゐる。文政十一年著者の序がある。

【参考】近松之研究 内田綱山 ○近松傑作全集 卷之四 近松本宅 ○近松名作集 上解題 本全集 第十二卷 解題 木谷清時 (近松) 正三 全集 第十二卷 解題 三卷 寛 (著者) 観劇(著者) 人 編(著者) 【名稱】雪初に雪の魚と稱する奇魚の記事があるので、「雪の魚の如くはじめをばりの鰻竹なきをうらやみて」本書の題名としたものと見える。【解説】編者が多年諸國に巡遊して、目撃した奇事・異蹟を綴じたもので、概ね記實ではあるけれども、今の世には信じ難い事もある。多く圖畫を描む。上巻に雪の魚・野馬・山上の雷・雷歌・折脚門・白雨の鐘・瑞々の毛等五十三項。中巻に曲玉・河津渡・江口の君堂・大物橋・八幡橋・獅子頭・道通等六十三項。下巻に高砂の松人窟

【参考】近松之研究 内田綱山 ○近松傑作全集 卷之四 近松本宅 ○近松名作集 上解題 本全集 第十二卷 解題 木谷清時 (近松) 正三 全集 第十二卷 解題 三卷 寛 (著者) 観劇(著者) 人 編(著者) 【名稱】雪初に雪の魚と稱する奇魚の記事があるので、「雪の魚の如くはじめをばりの鰻竹なきをうらやみて」本書の題名としたものと見える。【解説】編者が多年諸國に巡遊して、目撃した奇事・異蹟を綴じたもので、概ね記實ではあるけれども、今の世には信じ難い事もある。多く圖畫を描む。上巻に雪の魚・野馬・山上の雷・雷歌・折脚門・白雨の鐘・瑞々の毛等五十三項。中巻に曲玉・河津渡・江口の君堂・大物橋・八幡橋・獅子頭・道通等六十三項。下巻に高砂の松人窟

【参考】近松之研究 内田綱山 ○近松傑作全集 卷之四 近松本宅 ○近松名作集 上解題 本全集 第十二卷 解題 木谷清時 (近松) 正三 全集 第十二卷 解題 三卷 寛 (著者) 観劇(著者) 人 編(著者) 【名稱】雪初に雪の魚と稱する奇魚の記事があるので、「雪の魚の如くはじめをばりの鰻竹なきをうらやみて」本書の題名としたものと見える。【解説】編者が多年諸國に巡遊して、目撃した奇事・異蹟を綴じたもので、概ね記實ではあるけれども、今の世には信じ難い事もある。多く圖畫を描む。上巻に雪の魚・野馬・山上の雷・雷歌・折脚門・白雨の鐘・瑞々の毛等五十三項。中巻に曲玉・河津渡・江口の君堂・大物橋・八幡橋・獅子頭・道通等六十三項。下巻に高砂の松人窟

【参考】近松之研究 内田綱山 ○近松傑作全集 卷之四 近松本宅 ○近松名作集 上解題 本全集 第十二卷 解題 木谷清時 (近松) 正三 全集 第十二卷 解題 三卷 寛 (著者) 観劇(著者) 人 編(著者) 【名稱】雪初に雪の魚と稱する奇魚の記事があるので、「雪の魚の如くはじめをばりの鰻竹なきをうらやみて」本書の題名としたものと見える。【解説】編者が多年諸國に巡遊して、目撃した奇事・異蹟を綴じたもので、概ね記實ではあるけれども、今の世には信じ難い事もある。多く圖畫を描む。上巻に雪の魚・野馬・山上の雷・雷歌・折脚門・白雨の鐘・瑞々の毛等五十三項。中巻に曲玉・河津渡・江口の君堂・大物橋・八幡橋・獅子頭・道通等六十三項。下巻に高砂の松人窟

【参考】近松之研究 内田綱山 ○近松傑作全集 卷之四 近松本宅 ○近松名作集 上解題 本全集 第十二卷 解題 木谷清時 (近松) 正三 全集 第十二卷 解題 三卷 寛 (著者) 観劇(著者) 人 編(著者) 【名稱】雪初に雪の魚と稱する奇魚の記事があるので、「雪の魚の如くはじめをばりの鰻竹なきをうらやみて」本書の題名としたものと見える。【解説】編者が多年諸國に巡遊して、目撃した奇事・異蹟を綴じたもので、概ね記實ではあるけれども、今の世には信じ難い事もある。多く圖畫を描む。上巻に雪の魚・野馬・山上の雷・雷歌・折脚門・白雨の鐘・瑞々の毛等五十三項。中巻に曲玉・河津渡・江口の君堂・大物橋・八幡橋・獅子頭・道通等六十三項。下巻に高砂の松人窟

【参考】近松之研究 内田綱山 ○近松傑作全集 卷之四 近松本宅 ○近松名作集 上解題 本全集 第十二卷 解題 木谷清時 (近松) 正三 全集 第十二卷 解題 三卷 寛 (著者) 観劇(著者) 人 編(著者) 【名稱】雪初に雪の魚と稱する奇魚の記事があるので、「雪の魚の如くはじめをばりの鰻竹なきをうらやみて」本書の題名としたものと見える。【解説】編者が多年諸國に巡遊して、目撃した奇事・異蹟を綴じたもので、概ね記實ではあるけれども、今の世には信じ難い事もある。多く圖畫を描む。上巻に雪の魚・野馬・山上の雷・雷歌・折脚門・白雨の鐘・瑞々の毛等五十三項。中巻に曲玉・河津渡・江口の君堂・大物橋・八幡橋・獅子頭・道通等六十三項。下巻に高砂の松人窟

【参考】近松之研究 内田綱山 ○近松傑作全集 卷之四 近松本宅 ○近松名作集 上解題 本全集 第十二卷 解題 木谷清時 (近松) 正三 全集 第十二卷 解題 三卷 寛 (著者) 観劇(著者) 人 編(著者) 【名稱】雪初に雪の魚と稱する奇魚の記事があるので、「雪の魚の如くはじめをばりの鰻竹なきをうらやみて」本書の題名としたものと見える。【解説】編者が多年諸國に巡遊して、目撃した奇事・異蹟を綴じたもので、概ね記實ではあるけれども、今の世には信じ難い事もある。多く圖畫を描む。上巻に雪の魚・野馬・山上の雷・雷歌・折脚門・白雨の鐘・瑞々の毛等五十三項。中巻に曲玉・河津渡・江口の君堂・大物橋・八幡橋・獅子頭・道通等六十三項。下巻に高砂の松人窟

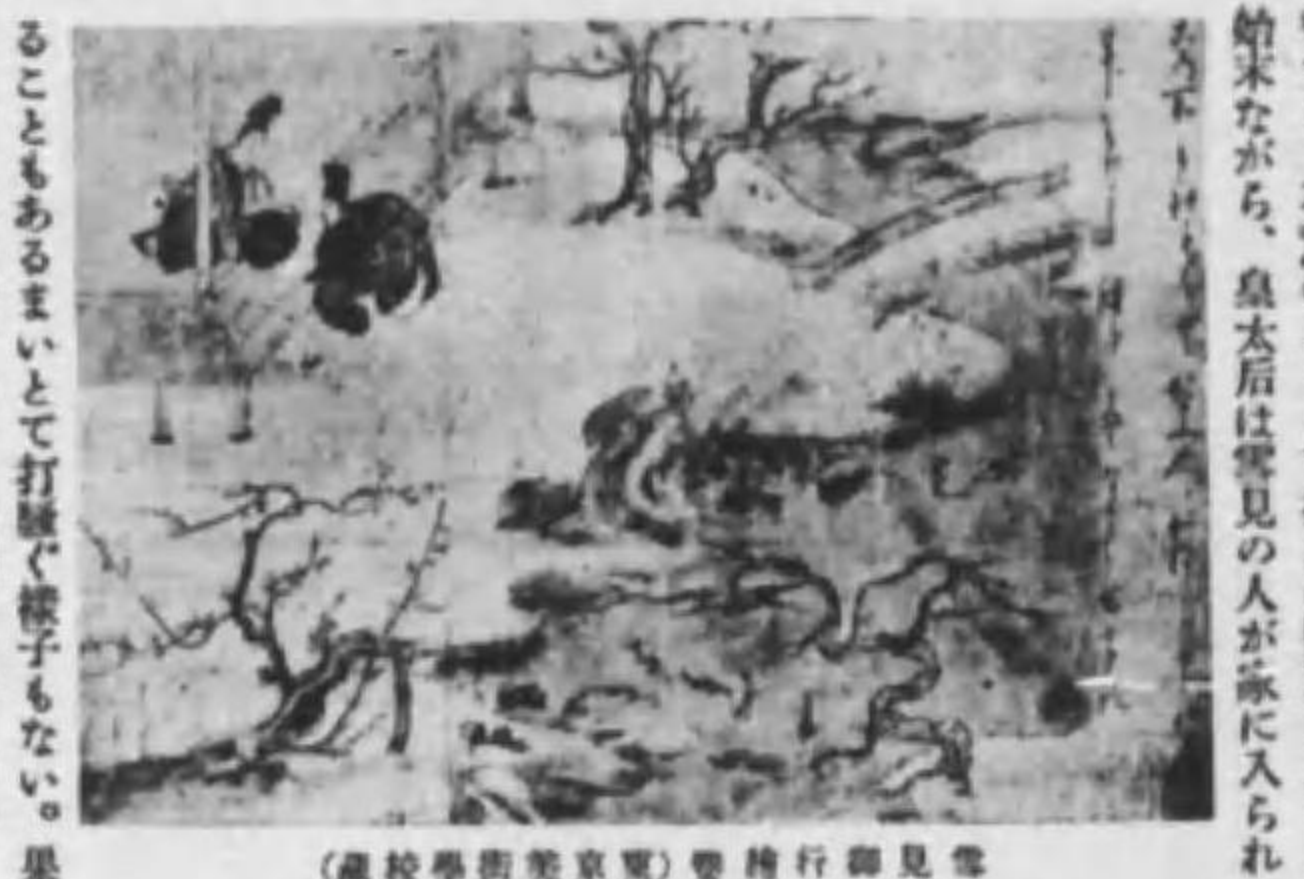


雪見御幸繪巻(部分) 繪巻 繪巻

【参考】近松之研究 内田綱山 ○近松傑作全集 卷之四 近松本宅 ○近松名作集 上解題 本全集 第十二卷 解題 木谷清時 (近松) 正三 全集 第十二卷 解題 三卷 寛 (著者) 観劇(著者) 人 編(著者) 【名稱】雪初に雪の魚と稱する奇魚の記事があるので、「雪の魚の如くはじめをばりの鰻竹なきをうらやみて」本書の題名としたものと見える。【解説】編者が多年諸國に巡遊して、目撃した奇事・異蹟を綴じたもので、概ね記實ではあるけれども、今の世には信じ難い事もある。多く圖畫を描む。上巻に雪の魚・野馬・山上の雷・雷歌・折脚門・白雨の鐘・瑞々の毛等五十三項。中巻に曲玉・河津渡・江口の君堂・大物橋・八幡橋・獅子頭・道通等六十三項。下巻に高砂の松人窟

【参考】近松之研究 内田綱山 ○近松傑作全集 卷之四 近松本宅 ○近松名作集 上解題 本全集 第十二卷 解題 木谷清時 (近松) 正三 全集 第十二卷 解題 三卷 寛 (著者) 観劇(著者) 人 編(著者) 【名稱】雪初に雪の魚と稱する奇魚の記事があるので、「雪の魚の如くはじめをばりの鰻竹なきをうらやみて」本書の題名としたものと見える。【解説】編者が多年諸國に巡遊して、目撃した奇事・異蹟を綴じたもので、概ね記實ではあるけれども、今の世には信じ難い事もある。多く圖畫を描む。上巻に雪の魚・野馬・山上の雷・雷歌・折脚門・白雨の鐘・瑞々の毛等五十三項。中巻に曲玉・河津渡・江口の君堂・大物橋・八幡橋・獅子頭・道通等六十三項。下巻に高砂の松人窟

【参考】近松之研究 内田綱山 ○近松傑作全集 卷之四 近松本宅 ○近松名作集 上解題 本全集 第十二卷 解題 木谷清時 (近松) 正三 全集 第十二卷 解題 三卷 寛 (著者) 観劇(著者) 人 編(著者) 【名稱】雪初に雪の魚と稱する奇魚の記事があるので、「雪の魚の如くはじめをばりの鰻竹なきをうらやみて」本書の題名としたものと見える。【解説】編者が多年諸國に巡遊して、目撃した奇事・異蹟を綴じたもので、概ね記實ではあるけれども、今の世には信じ難い事もある。多く圖畫を描む。上巻に雪の魚・野馬・山上の雷・雷歌・折脚門・白雨の鐘・瑞々の毛等五十三項。中巻に曲玉・河津渡・江口の君堂・大物橋・八幡橋・獅子頭・道通等六十三項。下巻に高砂の松人窟



雪見御幸繪巻(部分) 繪巻 繪巻

【参考】近松之研究 内田綱山 ○近松傑作全集 卷之四 近松本宅 ○近松名作集 上解題 本全集 第十二卷 解題 木谷清時 (近松) 正三 全集 第十二卷 解題 三卷 寛 (著者) 観劇(著者) 人 編(著者) 【名稱】雪初に雪の魚と稱する奇魚の記事があるので、「雪の魚の如くはじめをばりの鰻竹なきをうらやみて」本書の題名としたものと見える。【解説】編者が多年諸國に巡遊して、目撃した奇事・異蹟を綴じたもので、概ね記實ではあるけれども、今の世には信じ難い事もある。多く圖畫を描む。上巻に雪の魚・野馬・山上の雷・雷歌・折脚門・白雨の鐘・瑞々の毛等五十三項。中巻に曲玉・河津渡・江口の君堂・大物橋・八幡橋・獅子頭・道通等六十三項。下巻に高砂の松人窟

元禄東水垣の板行と思はれをゆりわか高麗... 實は水からくり本位の金平式に改修されて...



(源朝書圖同節) 日太正夫太小器日

つて出陣の途に上る。(相田の船) 秀虎が馳せ... 付けた時には、既に百合若等の船は遠く消...

その領國は別府兄弟に賜はつたといふことを... 耳にする。(有馬の湯) 秀虎は昔の武士に立ち...

と一重の妻が文里の目の前に現はれ、切ない... 心をしみんと語るかと思へば、短夜の夢で...

と一重の妻が文里の目の前に現はれ、切ない... 心をしみんと語るかと思へば、短夜の夢で...

と一重の妻が文里の目の前に現はれ、切ない... 心をしみんと語るかと思へば、短夜の夢で...

と一重の妻が文里の目の前に現はれ、切ない... 心をしみんと語るかと思へば、短夜の夢で...

と一重の妻が文里の目の前に現はれ、切ない... 心をしみんと語るかと思へば、短夜の夢で...

と一重の妻が文里の目の前に現はれ、切ない... 心をしみんと語るかと思へば、短夜の夢で...

と一重の妻が文里の目の前に現はれ、切ない... 心をしみんと語るかと思へば、短夜の夢で...

と一重の妻が文里の目の前に現はれ、切ない... 心をしみんと語るかと思へば、短夜の夢で...

と一重の妻が文里の目の前に現はれ、切ない... 心をしみんと語るかと思へば、短夜の夢で...

と一重の妻が文里の目の前に現はれ、切ない... 心をしみんと語るかと思へば、短夜の夢で...

と一重の妻が文里の目の前に現はれ、切ない... 心をしみんと語るかと思へば、短夜の夢で...

れた趣向の如きも、多くは原案あるものに過... ぎ予願の獨創性に乏しい。即ち二段目の有馬...

藝名を鈴川小春と呼ばれ、寄席藝人として美... の評判が高かつた。十七の春、さる大名の...

つた。 (石川(三)) 青の程 (名) 内題には、二筋道三編青の...

と一重の妻が文里の目の前に現はれ、切ない... 心をしみんと語るかと思へば、短夜の夢で...

よ

夜嵐於衣花 遺仇夢 (上) 五編十五册 (著者) 岡本龍造 (題名) 遺...

【批評】本書は、「島道阿松海上新話」別題に... 次々海部小説中の雄篇であつて、文章もこの...

【補遺】冬夕暮、文里は遺女一重の事を忘れ... かね、鬱々として病氣になつたまま、貞操な女...

【補遺】冬夕暮、文里は遺女一重の事を忘れ... かね、鬱々として病氣になつたまま、貞操な女...

香外六十二巻、別巻二十八巻あり、現行観世流

或三編(日本書紀全集所収)○漢曲大観(藤村)未

すべく、各家元の証書に依つて狂言詞やワキ

もの。この語尾變化を活用(動詞)と云ふ。用

【研究書】能作書(室町十六部)○申樂談

○漢曲大観七巻(藤村)○新編漢曲

助を得て、用附(裝束等)も示した。而して更

言の名は體用、すなはちものと物の實體と功用

【研究書】能作書(室町十六部)○申樂談

【参考】漢曲の研究(尾形武次郎)○漢曲大観

に親切な説明を附して特殊な諸方を教へて

は必ず活用を持つてゐたので、自ら活用ある

【研究書】能作書(室町十六部)○申樂談

【参考】漢曲の研究(尾形武次郎)○漢曲大観

を網羅してゐる點に於て一大特色がある。

品詞、即ち用言と云ふ意味に解せらるゝやう

【研究書】能作書(室町十六部)○申樂談

【参考】漢曲の研究(尾形武次郎)○漢曲大観

その精細なると明確なるとは誠に敬服に値す

品詞(動詞)に分つ。動詞と形容詞及び形容

【研究書】能作書(室町十六部)○申樂談

【参考】漢曲の研究(尾形武次郎)○漢曲大観

る。古来の諸註釋や研究を集大成したばかり

の類似を持つてゐることは、わが國語の特

【研究書】能作書(室町十六部)○申樂談

【参考】漢曲の研究(尾形武次郎)○漢曲大観

なく、更に著者の深き造詣を以て、困難な

微である。一は状態概念、一は特性概念を現

【研究書】能作書(室町十六部)○申樂談

【参考】漢曲の研究(尾形武次郎)○漢曲大観

る。古来の諸註釋や研究を集大成したばかり

はし、實體概念を現はす名詞に對するもの。

【研究書】能作書(室町十六部)○申樂談

【参考】漢曲の研究(尾形武次郎)○漢曲大観

すべく、各家元の証書に依つて狂言詞やワキ

兩者が共に體言の叙述をなすことが同一であ

【研究書】能作書(室町十六部)○申樂談

【参考】漢曲の研究(尾形武次郎)○漢曲大観

助を得て、用附(裝束等)も示した。而して更

をなし、形容詞が良行體格の語尾を取れば、

【研究書】能作書(室町十六部)○申樂談

【参考】漢曲の研究(尾形武次郎)○漢曲大観

その精細なると明確なるとは誠に敬服に値す

助動詞の連類、動詞と同じく、又共に一定の

【研究書】能作書(室町十六部)○申樂談

【参考】漢曲の研究(尾形武次郎)○漢曲大観

る。古来の諸註釋や研究を集大成したばかり

の用法に應じて、或は體言に準せられ、或は副詞

【研究書】能作書(室町十六部)○申樂談

【参考】漢曲の研究(尾形武次郎)○漢曲大観

なく、更に著者の深き造詣を以て、困難な

の價値を取る。その異なるところは、(一)意

【研究書】能作書(室町十六部)○申樂談

【参考】漢曲の研究(尾形武次郎)○漢曲大観

すべく、各家元の証書に依つて狂言詞やワキ

のみなならず、共に活用によつて體言の修飾

【研究書】能作書(室町十六部)○申樂談

【参考】漢曲の研究(尾形武次郎)○漢曲大観

を網羅してゐる點に於て一大特色がある。

なした。形容詞が良行體格の語尾を取れば、

【研究書】能作書(室町十六部)○申樂談

【参考】漢曲の研究(尾形武次郎)○漢曲大観

その精細なると明確なるとは誠に敬服に値す

助動詞の連類、動詞と同じく、又共に一定の

【研究書】能作書(室町十六部)○申樂談

【参考】漢曲の研究(尾形武次郎)○漢曲大観

る。古来の諸註釋や研究を集大成したばかり

の用法に應じて、或は體言に準せられ、或は副詞

【研究書】能作書(室町十六部)○申樂談

【参考】漢曲の研究(尾形武次郎)○漢曲大観

なく、更に著者の深き造詣を以て、困難な

の價値を取る。その異なるところは、(一)意

【研究書】能作書(室町十六部)○申樂談

【参考】漢曲の研究(尾形武次郎)○漢曲大観

すべく、各家元の証書に依つて狂言詞やワキ

のみなならず、共に活用によつて體言の修飾

【研究書】能作書(室町十六部)○申樂談

【参考】漢曲の研究(尾形武次郎)○漢曲大観

を網羅してゐる點に於て一大特色がある。

なした。形容詞が良行體格の語尾を取れば、

【研究書】能作書(室町十六部)○申樂談

【参考】漢曲の研究(尾形武次郎)○漢曲大観

その精細なると明確なるとは誠に敬服に値す

助動詞の連類、動詞と同じく、又共に一定の

【研究書】能作書(室町十六部)○申樂談

【参考】漢曲の研究(尾形武次郎)○漢曲大観

る。古来の諸註釋や研究を集大成したばかり

の用法に應じて、或は體言に準せられ、或は副詞

【研究書】能作書(室町十六部)○申樂談

【参考】漢曲の研究(尾形武次郎)○漢曲大観

なく、更に著者の深き造詣を以て、困難な

の價値を取る。その異なるところは、(一)意

【研究書】能作書(室町十六部)○申樂談

【参考】漢曲の研究(尾形武次郎)○漢曲大観

すべく、各家元の証書に依つて狂言詞やワキ

のみなならず、共に活用によつて體言の修飾

【研究書】能作書(室町十六部)○申樂談

【参考】漢曲の研究(尾形武次郎)○漢曲大観

を網羅してゐる點に於て一大特色がある。

なした。形容詞が良行體格の語尾を取れば、

【研究書】能作書(室町十六部)○申樂談

【参考】漢曲の研究(尾形武次郎)○漢曲大観

その精細なると明確なるとは誠に敬服に値す

助動詞の連類、動詞と同じく、又共に一定の

【研究書】能作書(室町十六部)○申樂談

【参考】漢曲の研究(尾形武次郎)○漢曲大観

る。古来の諸註釋や研究を集大成したばかり

の用法に應じて、或は體言に準せられ、或は副詞

【研究書】能作書(室町十六部)○申樂談

【参考】漢曲の研究(尾形武次郎)○漢曲大観

なく、更に著者の深き造詣を以て、困難な

の價値を取る。その異なるところは、(一)意

【研究書】能作書(室町十六部)○申樂談

【参考】漢曲の研究(尾形武次郎)○漢曲大観

すべく、各家元の証書に依つて狂言詞やワキ

のみなならず、共に活用によつて體言の修飾

【研究書】能作書(室町十六部)○申樂談

【参考】漢曲の研究(尾形武次郎)○漢曲大観

を網羅してゐる點に於て一大特色がある。

なした。形容詞が良行體格の語尾を取れば、

【研究書】能作書(室町十六部)○申樂談

【参考】漢曲の研究(尾形武次郎)○漢曲大観

その精細なると明確なるとは誠に敬服に値す

助動詞の連類、動詞と同じく、又共に一定の

義言(一六八)を見よ。
義言(一六八)を見よ。
義言(一六八)を見よ。

義言(一六八)を見よ。
義言(一六八)を見よ。
義言(一六八)を見よ。

義言(一六八)を見よ。
義言(一六八)を見よ。
義言(一六八)を見よ。



山下文太郎、三男は初代中村富十郎、四男は

(月三年三編覽) 附書別役(歌四清書道)

三代あやめ、いづれも名優として聞えた。
三代あやめ、いづれも名優として聞えた。

三代あやめ、いづれも名優として聞えた。
三代あやめ、いづれも名優として聞えた。

三代あやめ、いづれも名優として聞えた。
三代あやめ、いづれも名優として聞えた。

なつた。卒業の前年(四十三)秋には、文藝協...

其處に彼の宗教的・理想派的態度があるが、そ...

維新とあり、殺するまで、竹本座で惣後見を...

て来た、我はこゝに召されてゐるものに決し...

「狂恋ノヤツ也」云々云々「ハル」と評...

然沙汰止みとなつた。その後十六年を結核延...

来、文三郎は近江に数々の交渉を行つて数々...

萬の完成を認められて以来、元文四年四月ひ...

分を築きしめる企圖に成功してゐる。(5)は新古今調の特色たる優艶と玄絶とをかねた取材の洗練された申分のない作である。

【参考】百練抄〇明月記〇皇朝抄〇源家長日記〇風管抄〇六代勝事記〇天王寺書記〇能中抄〇百人一首一夕話〇扶桑名書

【参考】百練抄〇明月記〇皇朝抄〇源家長日記〇風管抄〇六代勝事記〇天王寺書記〇能中抄〇百人一首一夕話〇扶桑名書

【参考】百練抄〇明月記〇皇朝抄〇源家長日記〇風管抄〇六代勝事記〇天王寺書記〇能中抄〇百人一首一夕話〇扶桑名書

【参考】百練抄〇明月記〇皇朝抄〇源家長日記〇風管抄〇六代勝事記〇天王寺書記〇能中抄〇百人一首一夕話〇扶桑名書

じない。(奥州)強ヶ辻(鎌倉)より歸國する彼房を錦戸の軍勢が襲ふが如く破られる。片岡八郎が駆けつけ自決せんとするを養房が留め

【参考】百練抄〇明月記〇皇朝抄〇源家長日記〇風管抄〇六代勝事記〇天王寺書記〇能中抄〇百人一首一夕話〇扶桑名書

【参考】百練抄〇明月記〇皇朝抄〇源家長日記〇風管抄〇六代勝事記〇天王寺書記〇能中抄〇百人一首一夕話〇扶桑名書

【参考】百練抄〇明月記〇皇朝抄〇源家長日記〇風管抄〇六代勝事記〇天王寺書記〇能中抄〇百人一首一夕話〇扶桑名書

【参考】百練抄〇明月記〇皇朝抄〇源家長日記〇風管抄〇六代勝事記〇天王寺書記〇能中抄〇百人一首一夕話〇扶桑名書

をその父の許に歸らしめたのは、三郎を味方に引入れようとする頼朝の下心である事を、見透つてゐたので、強ひて勸告を許さなかつたのだと位で、我が子の屍の前に述べた

【参考】百練抄〇明月記〇皇朝抄〇源家長日記〇風管抄〇六代勝事記〇天王寺書記〇能中抄〇百人一首一夕話〇扶桑名書

【参考】百練抄〇明月記〇皇朝抄〇源家長日記〇風管抄〇六代勝事記〇天王寺書記〇能中抄〇百人一首一夕話〇扶桑名書

【参考】百練抄〇明月記〇皇朝抄〇源家長日記〇風管抄〇六代勝事記〇天王寺書記〇能中抄〇百人一首一夕話〇扶桑名書

【参考】百練抄〇明月記〇皇朝抄〇源家長日記〇風管抄〇六代勝事記〇天王寺書記〇能中抄〇百人一首一夕話〇扶桑名書

り、佳作とは言ひ難い。【影響】大政冬夏の陣を義経記の世界に採つた最初の作と言はれ、(南無観世音菩薩)等々(男)義経新合狀(義経新合狀)等を貫く一群の作品を胎動したものと

【参考】百練抄〇明月記〇皇朝抄〇源家長日記〇風管抄〇六代勝事記〇天王寺書記〇能中抄〇百人一首一夕話〇扶桑名書

【参考】百練抄〇明月記〇皇朝抄〇源家長日記〇風管抄〇六代勝事記〇天王寺書記〇能中抄〇百人一首一夕話〇扶桑名書

【参考】百練抄〇明月記〇皇朝抄〇源家長日記〇風管抄〇六代勝事記〇天王寺書記〇能中抄〇百人一首一夕話〇扶桑名書

【参考】百練抄〇明月記〇皇朝抄〇源家長日記〇風管抄〇六代勝事記〇天王寺書記〇能中抄〇百人一首一夕話〇扶桑名書

侍は若君六代御前と共に草庵に隠れて夫の安否を氣づかつてゐる所、朝方の巨懸熊火之遊が討手に向ふが、折から菅等密にやつして訪ねて来た主馬小倉吉は二人を背後に隠して



(本正) 源平千本

中納言知盛で、女房は典侍の局、娘は安徳帝であり、相模五郎は部下の船頭であつた。銀平は義経を亡す時節到来を喜び、亡霊の装ひで神に向ふ。やがて舟載は平氏が敗戦し、知盛は深傷を負つて立ち歸る。總ての企みを見抜いてゐた義経は、帝を守護する事を誓ひ、典侍の局は自害し、知盛は破れ負つて入水する。

に観音をさせる事になつてゐるのであるが、偶々訪ねて来た内侍と彌助との話から、お里せに彌左衛門は維盛を養育する事と、權太はこれを捕へようとする事とを討つて追ふ。彌左衛門の強腕に彌左衛門は隠れ切れず維盛を討つたとして首を入れた桶を差出すとする

義経は静に詮議を命じると、都から附き届つて来た忠信は、初音の鼓の皮となつた老狐の子であつたので、義経はこれに鼓を與へる。狐はその恩を謝し、今宵夜討の企である事を報じ、寛法師をも過力を以て誘ひ寄せて置く補へしめる。義経は横川舟載は熊登守敵と見破り、安徳帝をこれに託し、再命を討つて去らせる。(五段)藤原朝方が川越太郎に捕

四十四

は又世書とも、世書とも記す。四十四を「しし」と讀み得るのを、昔の近頃から、めでたく「よよし」(葉吉し)と讀んで、世の太平をことほぐ意に取らしたものである。【解説】四十四句から成る長篇の連歌(俳諧の巻式(別項)の一つで、百韻の二三の二折を採いた形式のものである。室町時代の中頃に起つたものか、享祿三年のものも現存してゐる。法式上の定めとしては、連歌に於ては、賦物(別項)は百韻と同じとする説があり(連歌集)、百韻に四つものものは、二つにても宜しいといふ説があり(連歌百韻)。その時の宗匠家の意見に任ずべしといふ説もある。古くは道喜にも用ひられたが、後には多く祝賀の連歌に用ひられるやうになつた。御城連歌は大抵この形式を用ひた。俳諧に於ても採り行はれた。【備考】

頼朝(六人室)を見よ。
頼朝(六人室)を見よ。

頼朝(六人室)を見よ。
頼朝(六人室)を見よ。

五冊に綴りて童男の心をいさましむるものなり」とある通り、享保九年十一月竹本座興行の浮瑠璃(右大將鎌倉實記)作者竹田(別項)を、八文字屋本傳奇物語に書き直したものである。その話の梗概は、源行家義経の愛妾御前(別項)に謀を設けて静を離別せよとする。義経は兄頼朝と不和のために京を落つこととなる。行家は武士山本某を殺し、その弟九郎義経といふものために廓に討たれる。園基の指圖をしてゐる小柴文内(別項)は後藤忠信の妻となつてゐた。この文内の家で忠信は桐原時の家来に捕はれたが、北條時政のために救免されるといふのである。この大筋の中に遊女を入れ、又源義経と同名の九郎義経や、佐藤四郎兵衛忠信と同名の九郎義経、源行家の行進等を生ぜしめて説話の興を多くしようとしてゐる。要するにこの頃流行の浮瑠璃物語の一つで、人情・性格の描寫より、説話の興に重きを置いた八文字屋本傳奇物語である。【備考】

頼朝三代鎌倉實記(たよりなが) 浮瑠璃(右大將鎌倉實記)作者竹田(別項)を、八文字屋本傳奇物語に書き直したものである。その話の梗概は、源行家義経の愛妾御前(別項)に謀を設けて静を離別せよとする。義経は兄頼朝と不和のために京を落つこととなる。行家は武士山本某を殺し、その弟九郎義経といふものために廓に討たれる。園基の指圖をしてゐる小柴文内(別項)は後藤忠信の妻となつてゐた。この文内の家で忠信は桐原時の家来に捕はれたが、北條時政のために救免されるといふのである。この大筋の中に遊女を入れ、又源義経と同名の九郎義経や、佐藤四郎兵衛忠信と同名の九郎義経、源行家の行進等を生ぜしめて説話の興を多くしようとしてゐる。要するにこの頃流行の浮瑠璃物語の一つで、人情・性格の描寫より、説話の興に重きを置いた八文字屋本傳奇物語である。【備考】

頼朝三代鎌倉實記(たよりなが) 浮瑠璃(右大將鎌倉實記)作者竹田(別項)を、八文字屋本傳奇物語に書き直したものである。その話の梗概は、源行家義経の愛妾御前(別項)に謀を設けて静を離別せよとする。義経は兄頼朝と不和のために京を落つこととなる。行家は武士山本某を殺し、その弟九郎義経といふものために廓に討たれる。園基の指圖をしてゐる小柴文内(別項)は後藤忠信の妻となつてゐた。この文内の家で忠信は桐原時の家来に捕はれたが、北條時政のために救免されるといふのである。この大筋の中に遊女を入れ、又源義経と同名の九郎義経や、佐藤四郎兵衛忠信と同名の九郎義経、源行家の行進等を生ぜしめて説話の興を多くしようとしてゐる。要するにこの頃流行の浮瑠璃物語の一つで、人情・性格の描寫より、説話の興に重きを置いた八文字屋本傳奇物語である。【備考】

頼朝七騎落

頼朝七騎落(たよりなが) 御前(別項)に謀を設けて静を離別せよとする。義経は兄頼朝と不和のために京を落つこととなる。行家は武士山本某を殺し、その弟九郎義経といふものために廓に討たれる。園基の指圖をしてゐる小柴文内(別項)は後藤忠信の妻となつてゐた。この文内の家で忠信は桐原時の家来に捕はれたが、北條時政のために救免されるといふのである。この大筋の中に遊女を入れ、又源義経と同名の九郎義経や、佐藤四郎兵衛忠信と同名の九郎義経、源行家の行進等を生ぜしめて説話の興を多くしようとしてゐる。要するにこの頃流行の浮瑠璃物語の一つで、人情・性格の描寫より、説話の興に重きを置いた八文字屋本傳奇物語である。【備考】

頼朝七騎落(たよりなが) 御前(別項)に謀を設けて静を離別せよとする。義経は兄頼朝と不和のために京を落つこととなる。行家は武士山本某を殺し、その弟九郎義経といふものために廓に討たれる。園基の指圖をしてゐる小柴文内(別項)は後藤忠信の妻となつてゐた。この文内の家で忠信は桐原時の家来に捕はれたが、北條時政のために救免されるといふのである。この大筋の中に遊女を入れ、又源義経と同名の九郎義経や、佐藤四郎兵衛忠信と同名の九郎義経、源行家の行進等を生ぜしめて説話の興を多くしようとしてゐる。要するにこの頃流行の浮瑠璃物語の一つで、人情・性格の描寫より、説話の興に重きを置いた八文字屋本傳奇物語である。【備考】

頼朝七騎落(たよりなが) 御前(別項)に謀を設けて静を離別せよとする。義経は兄頼朝と不和のために京を落つこととなる。行家は武士山本某を殺し、その弟九郎義経といふものために廓に討たれる。園基の指圖をしてゐる小柴文内(別項)は後藤忠信の妻となつてゐた。この文内の家で忠信は桐原時の家来に捕はれたが、北條時政のために救免されるといふのである。この大筋の中に遊女を入れ、又源義経と同名の九郎義経や、佐藤四郎兵衛忠信と同名の九郎義経、源行家の行進等を生ぜしめて説話の興を多くしようとしてゐる。要するにこの頃流行の浮瑠璃物語の一つで、人情・性格の描寫より、説話の興に重きを置いた八文字屋本傳奇物語である。【備考】

頼朝七騎落

頼朝七騎落(たよりなが) 御前(別項)に謀を設けて静を離別せよとする。義経は兄頼朝と不和のために京を落つこととなる。行家は武士山本某を殺し、その弟九郎義経といふものために廓に討たれる。園基の指圖をしてゐる小柴文内(別項)は後藤忠信の妻となつてゐた。この文内の家で忠信は桐原時の家来に捕はれたが、北條時政のために救免されるといふのである。この大筋の中に遊女を入れ、又源義経と同名の九郎義経や、佐藤四郎兵衛忠信と同名の九郎義経、源行家の行進等を生ぜしめて説話の興を多くしようとしてゐる。要するにこの頃流行の浮瑠璃物語の一つで、人情・性格の描寫より、説話の興に重きを置いた八文字屋本傳奇物語である。【備考】

頼朝七騎落(たよりなが) 御前(別項)に謀を設けて静を離別せよとする。義経は兄頼朝と不和のために京を落つこととなる。行家は武士山本某を殺し、その弟九郎義経といふものために廓に討たれる。園基の指圖をしてゐる小柴文内(別項)は後藤忠信の妻となつてゐた。この文内の家で忠信は桐原時の家来に捕はれたが、北條時政のために救免されるといふのである。この大筋の中に遊女を入れ、又源義経と同名の九郎義経や、佐藤四郎兵衛忠信と同名の九郎義経、源行家の行進等を生ぜしめて説話の興を多くしようとしてゐる。要するにこの頃流行の浮瑠璃物語の一つで、人情・性格の描寫より、説話の興に重きを置いた八文字屋本傳奇物語である。【備考】

頼朝七騎落(たよりなが) 御前(別項)に謀を設けて静を離別せよとする。義経は兄頼朝と不和のために京を落つこととなる。行家は武士山本某を殺し、その弟九郎義経といふものために廓に討たれる。園基の指圖をしてゐる小柴文内(別項)は後藤忠信の妻となつてゐた。この文内の家で忠信は桐原時の家来に捕はれたが、北條時政のために救免されるといふのである。この大筋の中に遊女を入れ、又源義経と同名の九郎義経や、佐藤四郎兵衛忠信と同名の九郎義経、源行家の行進等を生ぜしめて説話の興を多くしようとしてゐる。要するにこの頃流行の浮瑠璃物語の一つで、人情・性格の描寫より、説話の興に重きを置いた八文字屋本傳奇物語である。【備考】

久安三年詔して一の上となし、五年左大臣に拜し、從一位に叙し、六年美女多子(藤原公能の女)を納めて近衛天皇の女御となした。この時兄忠通、又藤原伊通の女皇子を養ひ、皇后となさんとした。こゝに於て兄弟相和せず、互に稱執し、加ふるに忠實は又忠通を疎んじ、その授くる所の朱鳥冠を奪つて頼朝に授け、氏長者となし、七年文書内覽の官を蒙つた。かくて頼朝の威勢日に加はり、忠通との確執益々深刻となり、遂に保元の亂を惹起したが、事志と違ひ強硬した。高倉天皇の治承元年詔して正一位太政大臣を贈られた。頼朝は管領兼左府といつた。併しながら平家源氏呼んで源左府といつた。併しながら平家源氏の權勢と共に群を抜いてゐた。天養二年書庫を新築し、その屋根は瓦葺とし、四方の板には石灰を塗り、戸には欄をめぐらし、四方に芝垣を築き、その外に堀をめぐらし、その外側に竹を植ゑ、更に普通の築垣をめぐらし、防火に心を用ひた。書庫の中には欄を設け、東の欄を陽欄、西の欄を陰欄と名づけ、朝・史・雜記・本朝の四部に分つてこれを納めた。この文庫を「六次書庫」と呼ぶ。【著作】台記二十卷○台記別記三十五卷○康治大書會記一卷○台記一巻。

【参考】台記(天養二年四月二日の巻) (朝野群載) 源氏物語(源氏物語)を見よ。

頼朝(姓名)源氏。世に源三位頼朝と稱す。【法號】頼朝又は眞朝、或は頼朝實通か。【別號】蓮華寺院(生野)長治元年に生れ、治承四年(一八四〇)五月宇治平家院に自盡す。享年七十七(墓所)濱州山縣郡邊

頼朝(姓名)源氏。世に源三位頼朝と稱す。【法號】頼朝又は眞朝、或は頼朝實通か。【別號】蓮華寺院(生野)長治元年に生れ、治承四年(一八四〇)五月宇治平家院に自盡す。享年七十七(墓所)濱州山縣郡邊

源寺(家名)仲政の子、仲綱・二條院讃岐の父【別號】初め白河院の判官に任じ、保元二年藤原に補はれたが、間もなく五位に叙して殿上を降り、久壽二年兵部卿に任じた。保元の上には後白河天皇が鳥羽院の御遷譲によつて召された武將十人のうちに加へられた。保元三年十二月二條天皇御即位の日、總理に亂入する狂人を捕へた功によつて殿上の職を賜はれた。平治の亂には一旦義朝に陣を結ぶた。大内守護の事は「公卿補任」に見えなかつた。恐らくは平治の亂に朝廷を守護し奉つたことの結果で、定まつた官職ではあるまい。書二條院が里内裏から南殿の櫻見に行幸になつて、去年の花と今年の如何であるかと問はせ給ふにつけて、「よそののみ思ふ雲井の花なればよみ奉り、秋の行幸には宿直所に留めて月を眺め、一人知れず大内山の山守は木がくれてのみ月をみるかな」とよみ奉つた。なほ三位を望み、「よるべなき便なき身は木の下に横四色を拾ひて世を渡るかな」と詠じ、清盛の奏請もあつて治承二年三位に叙して望を達し、翌年入道した。然るに清盛の専横が日に尋るので、遂に仁王を御かし、治承四年平家討伐の命令を四方に發した。謀が洩れたので仁王を奉じて關城寺に走つたが、計畫が漏れたので、奈良に走らうとして途に宇治橋を引いて對陣したが、敗れて遂に自盡した。又宇治に戦死せずして關原に運れたといふ傳説があり、鶴退治、舟長の懷柔等興味ある説話が傳へられてゐる。【著作】家集頼朝

【参考】源氏物語(源氏物語)を見よ。

頼朝(姓名)源氏。世に源三位頼朝と稱す。【法號】頼朝又は眞朝、或は頼朝實通か。【別號】蓮華寺院(生野)長治元年に生れ、治承四年(一八四〇)五月宇治平家院に自盡す。享年七十七(墓所)濱州山縣郡邊

頼朝(姓名)源氏。世に源三位頼朝と稱す。【法號】頼朝又は眞朝、或は頼朝實通か。【別號】蓮華寺院(生野)長治元年に生れ、治承四年(一八四〇)五月宇治平家院に自盡す。享年七十七(墓所)濱州山縣郡邊

政家集。○勳業集に入る歌は詞花一、千載十四、新古今四、新勳業集以下十三代に互つて凡そ四十首、合計凡そ五十九首。○私撰集に凡そ十首は後集二、頼朝花集、今撰集六、月詠集四。【歌人として】久安五年の右衛門督家合以下歌の歌合の作者となつてゐるが、判者と下つたことはない。後集も後集も彼の力量を稱し、彼と同座することを願つて思つた。【備考】地下であつた頃、度々宮中から歌を召され、大内守護の間、南殿の櫻を見に来る人々と交和歌の會を催した時、召されて歌をよみ、又和歌の召を催した時、召されて歌をよみ、清輔の催した向會に列し、後集の家にも遊んだ。小侍従とは愛妾關係があつたが、關係が絶えても歌の贈答はあつた(以上主要)。彼の歌は詞詠と生活歌を以て二分される。詞詠には豊富な想像力が見えるが、鋭さや強さは見えない。しかし後集が「心の底まで歌になり」無邪気と歌じてゐるのはこの方面であらう。後集は小侍従を初め、或る宮殿の女房などとの贈答や、位階の昇進を喜び、昇殿の聽たれぬ事を歎じたものが主となつてゐるが、その態度は消極的である。概して彼の歌は個性や時代性が極めて不明瞭である。【参考】大日本史百六十〇公卿補任○歌集分載○平治物語○平家物語○源朝實通○同前○長明無名抄

頼朝(姓名)源氏。世に源三位頼朝と稱す。【法號】頼朝又は眞朝、或は頼朝實通か。【別號】蓮華寺院(生野)長治元年に生れ、治承四年(一八四〇)五月宇治平家院に自盡す。享年七十七(墓所)濱州山縣郡邊

頼朝(姓名)源氏。世に源三位頼朝と稱す。【法號】頼朝又は眞朝、或は頼朝實通か。【別號】蓮華寺院(生野)長治元年に生れ、治承四年(一八四〇)五月宇治平家院に自盡す。享年七十七(墓所)濱州山縣郡邊

頼朝(姓名)源氏。世に源三位頼朝と稱す。【法號】頼朝又は眞朝、或は頼朝實通か。【別號】蓮華寺院(生野)長治元年に生れ、治承四年(一八四〇)五月宇治平家院に自盡す。享年七十七(墓所)濱州山縣郡邊

本(全二巻)等があるが、何れも同系統のものである。殊に寛文の刊本及び輸入本には同様の集書がある。即ち(一)元暦元年右近衛頼朝少將(頼朝)が書寫したものと(二)元暦元年右近衛頼朝少將(頼朝)が書寫したものと(三)この二帖は頼朝の書寫したものを記したものである。(四)元暦二年某が陳岩郡郡野平重隆入道明徹の本を以て書寫した旨を記したものである。(五)水享三年推背得殿が、密院の所藏なる頼朝像に記した集書である。最初の集書が成程であるならば鳥羽島から最初期の筆つた後になる。輸入本は上下各九巻の繪を挿入してゐる。【解説】部類を春・夏・秋・冬・別・旅・哀傷・戀・雜の十に分け、短歌六百八十七首を収めてゐる。歌は歌合の歌と生活を詠じたものとに明瞭に二分される。戀歌には普通の贈答の外、「知る人にせん」といふ關係で、「やさしきかたにはあらで申し語らふ」といふ關係の贈答がある。有名な「人しれず大内山の山守は」は戀の部に、「み山木のその梢とも見えたりし櫻は花にあらはれにけり」は春の部に見えるが、「よるべなき便なき身は」は埋木の花さくことも「は集中に見えない。【参考】台記(天養二年四月二日の巻) (朝野群載) 源氏物語(源氏物語)を見よ。

頼朝(姓名)源氏。世に源三位頼朝と稱す。【法號】頼朝又は眞朝、或は頼朝實通か。【別號】蓮華寺院(生野)長治元年に生れ、治承四年(一八四〇)五月宇治平家院に自盡す。享年七十七(墓所)濱州山縣郡邊

頼朝(姓名)源氏。世に源三位頼朝と稱す。【法號】頼朝又は眞朝、或は頼朝實通か。【別號】蓮華寺院(生野)長治元年に生れ、治承四年(一八四〇)五月宇治平家院に自盡す。享年七十七(墓所)濱州山縣郡邊

頼朝(姓名)源氏。世に源三位頼朝と稱す。【法號】頼朝又は眞朝、或は頼朝實通か。【別號】蓮華寺院(生野)長治元年に生れ、治承四年(一八四〇)五月宇治平家院に自盡す。享年七十七(墓所)濱州山縣郡邊

據の正本「三位頼政」(近松全堂)「源氏物語」で、これは別外題を「源の芝」といひ、筑後後興...

男源大夫判官頼朝をして宮を制せしめる。その際頼朝は宮が内侍所を御身に添へ持ち、且...

つた。(大切)扇の老、萬浦の前と猪の早大夫、殿が平等院に到り、頼朝親子の菩提を弔つて...

夜と朝 小説 頼朝小説 著者 益田 喜徳 原作 英國リットン卿作「ナイトメンド...

第一全篇が言文一致である點、第二記述を用ひてゐる點、第三漢字の體振りである點...

以外に短篇である。理想的寫實主義から享樂的寫實主義へ傾いて行つたこの作者の前期と...

な青色帯で書いてある。(石村) 悦鳥 蝦夷押領 著者 黄表 三郎 十五丁十八圓 作者 櫻川春町...

幕する。(十二)蝦夷の貨幣の昆布の数を日本のあらめさがるまゝに取替へて通用させる...



本書と創作し、等しく義勇を題材としてゐる。『鎌倉太平序』が大田南畝や、實在の人物を暗示するに引かへ、本書は、専ら判官忠臣の精神を以てし、異境の様子を誇張して想像する。寒風で土用中だけ暖かなる故寒暑が混在する事、是布を火焼湯煎にするなどの可笑味から、當時の家庭で洗濯や料理に應用する事々を利用する滑稽、金銀の貨幣の無い世界の不便さなどから、判官の義勇の末路をお目出度にするなど相當に努力のあとが見える。米價の高かつた天明七年に、或は是布、或の子等の大盤を淺草で賣した事實があり、それにヒントを得たのではないかと疑はれる。草紙の六義は、『毛詩』の序で「古今集」の誤名序の風・賦・比・興・雅・頌等になぞらへたもので、極めてかすかながら黄表紙の本質に觸れんとする態度が見え、かゝる點は、徳山山東京傳の「作者論」内十月編(前編)などで克明に考察されてゐる。三馬は本書を黄表紙名作二十三部の中に置くが、作品としては劣り、文章も巧みではない。(小巻)

萬の文反古 万の文反古(浮世草子 五巻) 【作者】西鶴が序には西鶴の署名と松蔭の印がある。【刊行】元禄九年。奥附に「元禄九年子ノ正月廿日 江戸萬屋清兵衛 再版本江兵衛、京上村平左衛門板とある。再版金は、奥附に、「正徳二壬辰歲九月廿日 大坂萬屋清兵衛町通田屋三良右衛門板」とある。【名】内題には「萬の文反古」とあるが、題簽には「西鶴文反古」とし、その下左に「世語文章」とやゝ小さく書してある。【語本】西鶴全集(常備文庫)西鶴文集(有朋堂文庫)西鶴名作集(日本名著全集)等所収。【掲載】『巻一』五は各四章、その他は各三章、

都合二十章より成り、各章皆善論の體を取つてゐる。(巻一) (一)播州に商用で行つてゐる父の許から、大阪なる留守居の許へ、差追つた大晦日の處に就いて指圖をしてやつた手紙。(二)江戸の或る豪家の手代九人連名を以て、若き當主の奢侈を断つて整理をつけ、同、鎌倉に隠居するやう計らはれたいと、



折から機河内和泉の國司陰山中納言信之がそこへ通りかゝり、雙方の争論を聴き、後徳丸の證據物たる馬印を割つてその中より通徳丸の證據を見出し、後徳丸の家督たるべきを裁許する。細家は無念道の方なく、夜陰に乗じた一人密かに忍び出で、蓋原に到り、後徳丸に願掛け、その命を取つて給はれと呪詛する。(二)後徳丸は幾度言ひ交せる陰山中納言の息女嫁の前に會はるために、中光と共に草紙賣子に身を賣して中納言の館を訪ねる。そこで後徳丸が娘の母上の求めに應じて書物の物語をする草紙賣子の節事がある。かくて娘と深く契を交した後徳丸は、深更に及んで別れを惜しみながら歸館の途につく。豫てから後徳丸を亡きものにせんと機曾を狙つてゐた廣景がこれを知り、一味を引連れ途上主従は無事に過れる。(三)中光夫婦は若君を伴ひ或る片里に身を隠し時節を窺つてゐる中、後徳丸は繼母の呪詛のため悪疾に罹り、終に百日となる。貧苦の中にも中光夫婦が種々と介抱するうち或る夜若君の悪戯を復した野良犬を打撃さうとして中光が過つて我が子の國若を殺す。夫婦の悲嘆も我が身よりと後徳丸は業病に諸人に面をさらせ本復するに同様に、所詮この家を去るに如かば、密かに家を脱れる(露のまへ道行)露の前は後徳丸が失せる事を知き、その行方を尋ねるため家を出て、諸所の神社・佛閣を拜み廻る末天王寺に來り、こゝで多くの異形異類の乞食・非人共に修行する。その際後徳丸に來た前法師と姉をせられた乞食に國若を開いて來た、國若ららずも後徳丸なりし事を知り、守夜より父が

その娘の嫁入支度を通じた京の弟から、その贅澤を諷めてやつた手紙。(二)父の體を探してゐる武士の兄弟があつて、弟が或る日警を見かけたが、欺かれて見逃したのを遺憾とし、單身その櫻雲に行方をくらましたことを見より知人に知らせた手紙。(三)故郷仙臺に妻を置き去りにして京に出た男が、京で屋々妻を持ち替へ、その入費のために貧に落ちたことを故郷の知人に知らせた手紙。(四)京の花時の雜音を嫌つて九州熊本に行つてゐる道心者から、熊本で得た男色の戀を京の知人に知らせた手紙。(五)大津の富者が死んで、その遺書を聞いて見ると、分配する遺産といふのは悉く手形で、現金はただ僅少であつたこと、並にその遺書が讀んで小娘を盗み貯へて長持に入れて置いたところ、それが露見したことを知らせた手紙。(三)主人の銀を遺失した武士の財布を拾得して返さなかつた町人が、そのために自殺した武士の娘に祟られて、死に勝る苦難を受くのを悔し、出家した弟に送つた代筆の手紙。(四)旅に出て久しく歸らなかつた妻子を死んだものと信じて、父母がその弟を知つて娘と夫婦とした所、その後男が歸つたので、兄弟は熊野の山中で果し合つて死に、妻は行方不明となつたことを知らせた手紙。(二)京の従兄弟の許から、江

戸に下りたいといふ意をいつてよしたものの對して、若し十分に勤徳をなす覺悟があらば、旅費を送るから來いと、勤儉に關する覺書を示してやつた手紙。(三)放浪のために熊野の山中に追はれた男が、異腹の兄弟の許へ、京に隠した借金の始末等について頼み、又隠居が密に庭中に埋めて置かれた銀を頼り出して、費消した體面を告白してやつた手紙。(巻五) (一)故郷を出奔して江戸で成功した男から自分の成功の原因を記して知らせた手紙。(二)善通の上、本夫を殺害して出奔した男に、死人の靈がつき纏ふので、男は途中から故郷に引返して自殺したことを知らせ、且つその遺子の首目なるものの行末を頼んでやつた老婆の手紙。(三)秋風立てたお春へ、遊女から薄情の體みを述べ、且つ遊女の意氣地を以て自殺する旨をいひやつた手紙。(四)吉野に引籠つた僧の許から、京の知人の許へ、夜伽の少年を一人世話してくれと頼んでやつた手紙。(解説)序・本文と版下の筆蹟が西鶴の手に似てゐる。但し序には「其月其日」と陰謀に記して成立年月の明記がない。この事と、これ程の完成した佳作が遺稿として出されたこととは、本書の西鶴の眞作であるかどうかを疑はしめたが、未だ何れとも定論がない。各善論の内容は一定してゐないが、大體は町人物に近い。併し中には「安立町の隠居の如き武家物に類するもの、御恨みを傳へまいらせ候の如き好色物に類するもの、京都の花鏡ひ二樓よし野山遊義の冬二の如き、特色物に類するものもある。抑々本書の特色は、既本書以前に於て、兩書物語二編本(以上五巻草子)、「好色三鳥傳」「好色文備授」(以上五

草子(別題)などがあるが、要するにこれ等は戀愛好色の範圍を出でない。それを本書に於ては上述の如く、廣く生活の各方面に互つて、更に深く精しく人性を穿ち、生活の相を描き出してゐる。この點に於て、江戸時代善論體文學の中の白眉である。但し各善論の終りに附した解説の短文は、文學としては全く蛇足であるばかりでなく、寧ろ興味を殺ぐものである。(註)

【語本】『西鶴全集』(有朋堂文庫)『西鶴名作集』(日本名著全集)等所収。【掲載】『巻一』五は各四章、その他は各三章、

【作者】『西鶴全集』(有朋堂文庫)『西鶴名作集』(日本名著全集)等所収。【掲載】『巻一』五は各四章、その他は各三章、

【語本】『西鶴全集』(有朋堂文庫)『西鶴名作集』(日本名著全集)等所収。【掲載】『巻一』五は各四章、その他は各三章、